転生したら無限スタートでした。リメイク

暁紅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごく一般人だったロリコンである主人公は謎の光に包まれ死んでしまう。

そして、次目覚めると愛してやまない幼女へと姿を変えられていたのだが実はその正体は・・・・

目の前に現れた怪しいげな老人は幼女を異世界へと旅立たせる。その目的を告げずに。

一体何の目的で異世界へと飛ばしたのか!!

この作品は作者の処女作【転生したら無限スタートでした。】のリメイクです。

主人公が同じくらいで物語は大きく変わっています。初めてでも大丈夫です。

目　次

妖怪山脈とウロボロス
ロリコンは死してもロリコンである。 1
キャンプには準備が大事。 4
ゴスロリは正義である。 7
第二の幼女現る。その正体は!! 12
奇襲!!白狼の妖怪 18
絶体絶命天狗達!!怒れる無限の咆哮 23
幼女との対面。ゴスロリ痴女の正体とは!! 31
夜の二人きりの宴 36
酒は飲んでも呑まれるな!! 40
妖怪大集合!!!会議始動!! 45
現れる最強のＢＢＡ 51
いざいけ妖怪の京都へ!! 56
黒歴史は絶対に残してはいけない。 61
あたりまえ、あたりまえ… あたりまえ妖怪 66
安倍晴明の憂鬱 71
少女の復讐は止むことは無い。 77
無限対人間 81
む？誰だ？誰だ？… もちろんワシだよ！ 88
復讐鬼と首なし騎手 93
僕が来た!!! 99
三枚おろしはやめられない。 105
三人の怪物はこうして戦闘を始める。 109
旅立ちの夜前編 113

旅立ちの夜後編 ―――――――― 119
殺人倫敦のセブンデイズ
一日目～夢の地へ冒険をⅠ～ ―――――――― 127

妖怪山脈とウロボロス
ロリコンは死してもロリコンである。

俺は光を見た。いや、光が迫ってきた。
視界全ては白へと染まり、身体には鉄の塊が当たったのか全身は強烈な痛みに苛まれ、時期に身体が動かなくなった。
「大丈夫か！」
「おい！」
「早く誰か救」
薄暗くなった視界には三人の人影がある。
一人は慌ててスマホを取り出し耳に当てどこかへ電話している。
多分救急車でも呼んでいるのだろう。
しかしもう遅い。
自分でもう死期を悟ってしまう。
あぁ、短くも長い人生だったな・・・ もっと色んな事したかったな・・
早速目として機能しなくなり虚空を見つめながら心の中で呟く。
次の人生できるなら幼女になりたいな・・・
ロリコンの彼は死ぬ最後の最後まで情けない事を思いながら、重くなっていく瞼を閉じる。
『ならその願いを叶えよう』
幻聴・・・ もう終わりか
意識は薄れ、魂が肉体から離れ輪廻の渦へ帰還し、新たな肉体に宿り新たな人生を繰り返す。
それが世界の理であり常識だ。
自分もそうなのだと思いながら意識を手放し、そして眩しいほどの光が目覚めることのないはずの彼を呼び覚ます。

「あれ・・・ なんで我生きて」
口調がおかしい!!なんじゃこりゃ！
二度と目覚めることの無かったはずの彼は蘇ったことに驚き、飛び起きるのだが、勢いあまり鉄の門へ頭を突き刺す。
『なんじゃ元気じゃのう死んだのに』
「誰」
抑揚のなく感情が篭っていない声で聞き返す。
鉄の門から頭を抜き声のした方を向くとそこに居たのは一人の老人だった。
顎に携えた地面スレスレまで伸びた白髭。
人生の苦労が顔に現れ至る所に皺がある。
腰を曲げ木の杖をつきながらゆっくりと老人は近づいてくる。
『挨拶をしておこう。わしの名は∈∪∩∩∈∈∪』
「なに?聞こえない」
『しまったのう、ワシの名は聞き取れんか。まぁ仕方ない神秘の薄れたアレでは仕方がないか。そうじゃのう・・・ 生前の名キリストとを名乗ろう』
「キリスト?あのキリスト?」
『うむ、お主が考えておる者であっとるぞ』
老人は真っ白な歯を魅せるように大きな笑みを浮かべた。
イエス・キリスト
世界で一番有名な宗教人物と言っても過言ではなく、並の神話の英雄よりも有名であるとんでも人物。
神話などに詳しくない彼でもその名を聞いたことぐらいはあった。
絵画【最後の晩餐】にて真ん中で食事をしているキリスト教の事実トップ。【神の子】であるともされ、怪我をたちまちに治したなどが有名な話だ。
そんな超有名な人物にあえて嬉しい、てか困惑してもいいはずなのに何故かそこまで嬉しくない。なんで?
『答えるのは簡単じゃ、自分の身体を見てみぃ』

「身体？はっ」
言われるがまま身体を見ると息を飲んだ。
男の手より二回り以上も小さくなっている手に、綺麗な色白の肌。等身も明らかに縮んでいて一八〇ｃｍあった身長は、推定一三五～一四〇ｃｍになっている事だろう。
股間には男なら誰しも持っている聖剣と言うか魔剣が存在せず、あるのは自己主張の小さい僅かに膨らんだ果実。全体的に黒で統一されながらも、黒の隙間から見え隠れする白の布地。言わずもがなゴスロリ服であった。
視界の端には黒より黒い漆黒とも呼ぶべき程真っ黒な長い髪が映っている。
「幼女？」
『なんだ随分と感情が薄いのう。死ぬ間際まで願っていた事が叶ったと言うのに』
「分からない。嬉しいけど嬉しくない？」
『ふむ、その身体の持ち主が原因のようじゃな、まぁ時期治るじゃろう』
自分からは見えないが綺麗に整い人形みたいな顔を少し傾け、深淵のような瞳で老人を見つめていた。
老人は止めていた歩みを再開し幼女の隣まで進む。
『さて、お主の願いを叶えたのだからわしの願いも叶えてもらうぞ』
「？」
『分からないだろう。だがあえて今は言わない、その時が来たら言おう。今は新たな生を堪能せよ』
わけがわからないよ。
どこぞの怪しげな宗教マスコットのような言葉を思ってしまう。
問いただそうと手を伸ばすが、突如空いた後ろの門に吸い込まれ、老人に手が届く事は無かった。
『すまんな、少年お主に全てを任せよう』
白と黒の入り交じった渦へ自念の言葉を投げかけながら開いた門を今一度閉じる。これから彼の身に起こる厄災に嘆きながら。

キャンプには準備が大事。

さて、イエスから追い出されはや数日が経過した。
目が覚めたのはどこかの森というか山というか・・・ とりあえず木が生い茂っている場所ではあった。
もちろんそこがどこだか分からず遭難状態であるのだが、それ以外に大きな問題があった。
この数日、睡眠食事休憩一切無し。ブラック会社ですら裸足で逃げ出すぐらい酷い環境で歩いているのだが、一向に疲労感や空腹が訪れない。
そう、考えれば簡単な事だ。この身体はイエスが作った身体なのだ、言わば偽神？詳しくは分からないが、人間を辞めているのは確定事項だと思う。
「いい加減飽きた」
ポロッと零れたその言葉には、数少ない感情が含まれていて苛立ちを感じる。
それもそのはず。いくら人間を辞め死ぬ事はまずないと言えどそれは肉体の話、精神は人間の俺なのだからいい加減誰かしらと他愛もない会話をしたい。
辺り一面は霧が発生していて、太陽の暖かな光を遮ると共に近視感などを与えず今の自分の居場所を分かりにくくしている。
そのせいで彼女は気づいていないが実は今いる場所から一ｋｍ以上離れていなかったりしている。
迷いながら困り果てている幼女を見つめる一人の視線があった。
「けけ、三日経ってもまだあんなにピンピン・・・ 人間じゃなくて妖怪くせぇな」
舌なめずりの音を鳴らしながら誰にいうわけでもなく独り言として呟く。全身を覆う白毛を逆立てながら。
そう覗き見している人物とは人間でない。
足はなく蛇より太く長い胴体はきりに紛れていて全体は見えない

が、約全長百m以上はある。さらに、白毛の胴体に所々ある青い文様は彼の怪しさをより強くしている。
顔は何処と無く犬に近いが、身体のことを考えるとイタチの方が近いのかもしれない。
彼の名はオンボノヤス。霧を操る妖怪である。
山などに多く生息しており、下手に踏み込んだ者を霧で惑わせる迷惑な妖怪だ。その性質上人間は仕事の邪魔だと目の敵にしていて、陰陽師により虐殺されていき殆ど彼しか残っていない。
そのため本来は種族であるはずのオンボノヤスを名として名乗り、まだまだ現役だと主張しているのである。
そんな彼だが突如として現れたゴスロリ幼女に警戒をしており、下級の妖怪である彼では具体的な種族や力は判別できず、監視し情報を得るため霧で捉えたのだ。
――そろそろ天狗達に伝えるかねぇ、新たな妖怪が来たと言えばなんとか
三日監視をして何も進展はない。となれば同じく下級の妖怪なのだろう。そう結論ずけその場を離れようとした時だ、過去最大級の悪寒に襲われたのは。
「なんだこりゃ！」
幼女の元には異様な光景が広がっていた。
つい先程まで何も感じなかった幼女からとてつもない量の魔力が溢れ、それこそ無限と思える程だ。
その魔力が振り上げた右腕に収束していき、地面に向け拳と共に放たれる。
地面との衝突はとてつもない爆発を起こす。霧は吹き飛ばされ、オンボノヤスも咄嗟に丸まり防御の姿勢を取ったが爆発のエネルギーは凄まじく、山から飛ばされ数十km以上向こう側にある山へ飛ばされる。
「霧消えた」
地殻変動が起きてもおかしくない事をしでかしたはずの山は一切ダメージはなく木が元気に背を伸ばす。当の本人は表情をひとつ動

かさず服についた埃を払って歩みを再開する。
――あぁいいイライラ解消だったわ。にしても何か妙に力湧くんだよな・・・ なんでだ、神特典？
偶然成功した魔力制御は奇跡であり、山や木には影響を与えず霧のみを吹き飛ばした。実際は霧を飛ばしたと言うより、元凶の妖怪を飛ばしたのだが本人は知る由はない。

ゴスロリは正義である。

霧がなくなり眩しいほど太陽の陽射しが差し込み視界は良好。道に迷うわけなく一時間程度で山を抜け、舗装された道へと出るのだが

「おかしい。建物が古い」

鬱陶しい木からでた時に視界に飛び込んできたのは明らかに時代の古い建物だった。

コンクリートなどの化学物質は使われておらず、その殆どが木で作られていて建物の高さも高くない。

しまいには小さな集落にいる人達は全員がもれなく着物である。

――タイムスリップでもしたのか？いや、舞台かもしれな・・・　それにしては凝りすぎなような気が

戸惑いながらもゆっくりと歩を進め、第一村人へと話しかける。

「ここはどこ？」

「おっ！なんだ嬢ちゃんか・・・　うん？その服は」

「ここは」

「なんじゃそりゃ!!なんだその服!!ちっとこっち来い」

第一村人の男に引きずられながら家の裏に連れていかれる。

正直抵抗をしようと思えば出来たけど、いましたら間違えて殺しちゃいそうだから無抵抗なだけだ。

けして、中二病だからとかじゃないからな！本心だからなこれ

誰に話しかけるわけでもなく心の中で考えていると、ハゲの男は頭皮を輝かせながら両肩を鷲掴みにする。

「なんだこの服見たことねぇぞ。この京一の商売の渉様が知らねぇなんざやべぇ品だろそれ」

「これ？洋服だけど」

「洋？まさか南蛮か！そうかそうかやっぱりそうなんだな、たくだから南蛮に目を向けろってあれほど」

顎に手を当て渉はブツブツ何かを小声で呟き始める。

―この反応本気？まさか・・・　ガチのタイムスリップかよ・・・・・　それに格好から戦国時代ぐらいか？いや分からんけど。こんな事なら

歴史ちゃんと学んどけばな
こちらもこちらでその無表情な顔に似合わず、渉を見つめながら長考に入る。
旗から見なくても今の二人はかなり異常であり、現代ならばすぐ警察を呼ばれてしまうだろう。
「おっと、すまねえ一人物思いにフケちまってな」
「別にいい」
独り言をじっと見つめて暇そうにしている幼女が目に入り、すぐにやめ会話を再開させた。
と、言ってもゴスロリ服に見惚れたのか高速で言葉を綴り、どんどん熱がこもりもうついていけない。
――大丈夫か？このおっさん？
そんな事を思い始めた時だ、おっさんに家へ招待されたのは。
なんでもこの服を詳しく調べたいらしい。まぁ特に問題ないので大人しく後ろをついていく。
「いやぁー助かったぜ。お得意様に服を作ろうと思っていたんだがよ、アイディアが湧かなくてな。だが、それを見たらビビッと来たんだ」
「ならいる？我特に大事じゃ――」
「マジか!!いよっし！さらに捗るぜ!!そしたら、代わりの服をやるよ！楽しみにしてな俺の最高傑作だからよ」
渉はガッツポーズを決めながら大喜びしているが、頭のスキンヘッドなどを含めるとかなりいかつい。

最初に出会った場所から数分歩き案内されたのは店と家が合体した建物だった。
壁の素材は天然の木であり、木のいい香りが漂い荒れている精神を落ち着かせる。
外には木の机の上に並べられた色とりどりの大量の着物が陳列されていて、周りと比べるとここだけ別世界になっている。
どうぞと中に案内され、昔懐かしい和室へと足を入れる。西洋のゴ

スロリと和室。本来見ることのできないその光景はまさにカオスだ。
「にしてもおかしい。建物が古すぎる」
ここに来るまでに建物を見ていたがその全てが古い木造建築だった。化学物質のコンクリートなどの建物はない。窓もガラスはなく木の板がハメられている。
それこそ過去に戻ったように思ってしまう。
――あっ、そう言えば渉が京って言ってたな。てことはここは京都だろ・・・ あぁ分かったそう言う街なんだな。
昔言った時はあんまりそう感じなかったけど、そうなんだろう。そう思いたい。
現実逃避するように早々に結論づける。
「すまねぇな待たせた」
「問題ない」
襖を器用に足で開け和室へと数着の着物を抱えながら入ってくる。
かなり重さがあったのか畳に置くとドスッと音がなり軽く埃が飛び上がる。
「さっき話してた新しい服だ。一応あんたに似合いそうなの選んだぜ、どっちがいい？」
畳に軽く二着の着物を広げる。
片方は中に着る薄い布が血のように真っ赤に染まっていて、その上から羽織る黒い布により禍々しさを増している。
その上帯には赤と黒が交互にクロスしていて、もう着れば魔王の風格を醸し出す。
確実にないな。魔王を目指してる訳でもないしこれはない。
速攻で否定しもう片方の着物に視線を移す。
今度はしたの布は純白の白であるのだが、その上から羽織る布は漆黒な黒である。
袖の先やつま先などの先端にはフリフリの白い布が付いていて、何処と無くゴスロリ風着物と捉えてしまう。
「こっち」
「おう、そっちだな。ならそっちで調整するぜ、寸法サイズ貰うぜいい

か？」
「構わない」
「よし頼むわ」
俺はそそくさと立ち上がり両手を横に広げピンと停止する。
渉はどこからとなく取り出した丈の定規で全身の寸法を図り始める。

「なるほどな。新たな妖怪が現れたか… ふむ、実力が不明か… さてどうしたものか」
黄緑色の着物に身を包み、低く強い声色で語った男は周りにいる自分と同じ格好をした男達に声をかける。
そのうち三人は顎に手を当て思考しているがいい案は浮かんでいない様子だ。
だが一人は違った。手を上にあげ意見があるのを示す。
「亜月か、申してみろ」
「はっ。戦力確認とした私の娘の知り合いを戦わせるべきかと」
「お主の娘の…… 椛か」
「はい。あの娘も自分の使命は理解してるかと」
先程から仕切っている男は亜月の意見について考える。
つい先日、一つ隣の山を守護していたオンボノヤスが突如として現れた者に、襲撃を受け今現在も目を覚ましていない。
今は新たに別の守護者を向かわせたとはいえ、その者が京にいる間は安心などできない。
陰陽師に襲われ逃げ出した妖怪が殆どのこの山では戦闘できる者など数少ない。正直今すぐ自分が赴きたいが、指導者を失えばどうなるかなど目に見えている。
十分に及ぶ沈黙の後重い口を開く。
「椛いるな」
「ここに」
葉っぱが風に誘われ踊り、指導者の前に集まると途端に飛び散り現

れたのは一人の少女だった。
白く短い髪は風に微かに靡き、その端正な顔と合間り素直に美しいと言いたくなる。髪の白に対し目立つように瞳は紅葉した楸のように赤い。
上半身の服は白いが下半身のミニスカートは黒く、袖口が赤く模様として何枚か楸が入っている。
片膝をつき頭を垂れている楸に男は宣告する。
「犬走楸、死ね」
「御意に」
現れた時とは逆に身体が葉っぱとなり風に乗り外へと消えていく。
宣告した男は悲しげな表情を浮かべていた。

第二の幼女現る。その正体は!!

かれこれ三日が経過した。
正直行くあてもないのであのまま家に居候させてもらいながら、軽い手伝いをしてる。
「おっ、すまんねぇ」
「別にいい」
「ふぁっやっぱり日本人はこれだな」
茶飲みからは白い湯気が髭のように長く空へ伸び、渉はゆっくり少しずつ淹れたてのお茶をすする。
まさかの社畜時代の成果がこんなところで発揮されるとは・・・
「もう少し待ってくれよ、今ちょうどお得意様用のが仕上がったからな。これでアンタのに取り掛かれる」
「楽しみ」
「任せろ!この京一の腕前しかとその目に焼き付けてろ」
服の袖を二の腕まで上げ、額に白い布を巻いて気合を入れ直す。三日三晩の徹夜だったが、それでも心の底から服が作るのが好きなのか笑顔を絶やすことは無い。
そんな彼の腕前は言っていた通り凄まじく、寸法に合わせ調整する作業は高速で仕立て上げられる。
寸分違わず間違えず糸を縫いつけ布を切る。疲れを見せないもはや美術の域まで高められた技は、服に詳しくない者も魅了していく。
集中すると時間は早く進み、あっという間に十分がたった頃だ。店の戸が開く音がなり、
「ごめんください、予約していたさとりです」
少女のような幼い声ながらも、どこか芯があり凛々しい・・・ 言うならば声に似合わない大人びた雰囲気がある声が聞こえてくる。
その声を聞いた渉は額の布を外し、首を軽く回し疲労を和らげる。
「来たみたいだな」
「誰?」

「ほら、さっきの服の人だよ。いつも通りの時間だな、そこら辺相変わらず几帳面だねぇ」
俺はよくわかんねえな・・・ けど、声的に幼女だろ?ならば行こう。よし行こう。今すぐ行こう。
顔を乗り出して言葉ではなく身体で表現する。三日も入ればだいたい理解できるようになり、髪を掻きむしり、
「あんま騒ぐなよってアンタ自身そんな感じじゃないか」
ここ三日口数は変わらない。日に多くても百文字喋ればいいほうであり、五十いかないこともあった。
そのことを踏まえればお得意様の前で騒ぐことも無いだろうと考え、一緒に会うことを了承する。
そそくさと作業部屋から完成したばかりの服を抱え店の方へ向かう。
「いらっしゃいませ!」
戸を開けながら大声で挨拶をする。少し暗い部屋にいたので突然の光に目を少し覆うが、指の隙間から幼女を見つけ興奮する。
身長はだいたい同じぐらいで俺より少し高いぐらい。
髪は日本人にはありえない淡い赤色で瞳も同じだ。顔はやはり日本人離れしていて端正な顔つきであり、それこそ美少女と呼ばれアイドルをしていてもおかしくはない。
それに反するように服は赤・黄緑・白の三色が入り交じっている美しい和服。
本来は顔と服が似合わないとなりそうなのだが、予想に反し服がしっかりとアシストし美しさにさらに磨きがかかっている。
――まさに最高の幼女だ。まじグッジョブ!!
心の中で親指を上げ感謝の意を渉に送る。
▽▽▽▽▽▽▽▽▽
―なるほど彼女が目標の人外ですか、面倒な役を押し付けられましたね・・・ やれやれ。
ため息混じりに命令をしてきた男大天狗の長である者を思い浮かべる。

彼女はその容姿通り日本人ではなく人間ですらない。
数多の妖怪達から恐れられ嫌われている種族覚妖怪である。
その種族は特に戦闘が得意という訳ではなく、ただ相手の心を読んでしまうのである。
それは隠したいトラウマや嫌な事であろうと問答無用に暴き盗み見る。この能力の前には神であろうと悪魔であろうと妖怪であろうと皆平等であり、防ぐことが出来ない。
そのため、本来は地底に篭もりまず出ることはないのだが、緊急事態だと叩き起こされ偵察として駆り出された。
来る予定だったこの店に居てくれて助かりましたね。いちいち探すのに心を読むのは疲れるので
「でだ、こっちの嬢ちゃんに手伝ってもらってな。新しい服を作り上げた」
「新しいですか。是非とも見たいですね」
「そうだろそうだろ。ではさっそく、これが最新作だ!!」
自信満々に広げ突き出したのは和服とはその一線を画した、全くの別物と呼べる代物だ。
上はすらっと裾が伸びていて、服の真ん中にはハート型の何かがついている。その上全体が青で出来ていながら、首元や袖先などは髪色と近しい色のフリフリがついている。
下は髪色と近しい色であり、袴のようにゆとりがあるので一瞬勘違いをしたが、すぐに別だと気づく。
股下部分が裂けておらず、一つの長い布が腰周りを覆う斬新なデザインだ。さらに裾が短く膝下までしかない。
「これが服」
あまりにもキテレツであり異常なそれは嫌悪感を抱くよりも、猛烈な興味をそそられる。
純粋に着てみたい。欲しい。
心の底を突く作品に正しく感動を覚える。
素材感を確かめるため受け取る。すると、またそこで衝撃に襲われる。

和服は布が暑く夏は脱ぎたい衝動に駆られていたが、この新作は布がかなり薄くサラサラしている。
「素晴らしい・・・ あと何着か作ってもらえますか？あっ、色違いも欲しいのですが」
「任せてくだせぇ！この京一の男がいくらでも作ってやりますぜ!!それと感謝ならこっちの嬢ちゃんにお願いします。なにせ、元を持っていたのは嬢ちゃんなんで」
「そうでしたか」
渉に向けていた身体を動かし人形のような少女へと向ける。
改めて見つめると分かりますが人形そのものですね。
じっと見つめるとあまりの美しさについ作り物のように思ってしまう心を隅に置き、今は感謝を述べようと口を開く。
「ありがとうございました。素晴らしい服に出会えました。私の名は古明地さとりです、貴方はなんと呼べば？」
まずは心を読む以外でも引き出せる情報は引き出さねばならないので、どうにか知りたいところですがどうでしょうか。
軽く頭を下げ折っている膝の上に手を置く。正座はあまり慣れていないが一時的ならばそこまで支障はない。
その返事に少女は首を傾げる。
「我の名は何？」
「「え？」」
「思い出せない」
「そう言えば名前知らなかったな、呼ぶ機会なかったから忘れてたな」
今思い出したのか手を叩いてかなり重要な事を口走る。
「そうでしたか。申し訳ありませんでした、辛い事を思い出させてしまいましたね」
「気にしてない。せっかくだから名付けしてほしい」
「私がですか」
「おっいいね！さとり様ならいい名が付けられますぜ」
予想だにしない切り返しに唖然としてしまう。
名付けとは重要な・・・ うーん困りましたね全く思いつかない。

かなり難しいのか頭を抱えながら必死に自分の知識をフル活動させ何かないか探る。十秒程立つと一つの正解へ辿り着けた。
「貴方がご自身の名を思い出すまでの一時的な仮名ですがいいですか？」
「もちろん」
「でしたら、私の故郷の言葉で正体不明と言う意味があるアンノウンはいかがですか？」
「アンノウン・・・」
「ほほーアンノウンね・・・ 長いな。略してアンでいいか？」
「ですね。私もそう呼ばせてもらいましょう」
「おっけー」
アンノウン改めアンと言う名に決まった少女は、感情の薄い抑揚のないまるで人形のような声を出す。
と、寄り道をしたがそろそろ本当の仕事をせねばならないと、三つ目の眼に意識を集中させる。
彼女ら覚妖怪は身体の近くにもう一つの眼があり、そこから相手の心を盗み見ることが出来る。
今は人里と言うこともあり、大天狗の風の力で光を屈折させ眼のみを透明化させている。
その眼を開かせ少女へと照準を合わせ覗く。パチリと開いた眼は少女を見つめ

闇を見た。
常闇より常闇であり、闇より闇な異常な何かという他ない。
こちらが覗いているのだと言うのに逆にこちらが見つめられているような不気味さ。人生を振り返っても心を読めないのは彼女が初。
それこそ適当に名付けた名前通りの【正体不明（アンノウン）】だった。

すぐに眼を閉じる。その間僅か二秒ほど。
なのだがそれだけでも身体は異常を訴え始める。
小刻みに身体が揺れ始め、途方もない目眩に吐き気。臓器に刃が刺さっているかのような痛み。
どうしようもない異常に身体が押しつぶされその場へと倒れ込み、意識を失った。

奇襲!!白狼の妖怪

倒れてから数時間が経過しようやく意識を取り戻した。
恐怖に震えていた身体はしっかりと落ち着き、目眩や吐き気なども全て治まっている。
「く、ここは」
ゆっくりと上半身を上げながら記憶をたどる。
数秒もすれば何があったのか思い出す。あの闇の事を。
過去の思い出なのだが、考えれば手が震え始める。未だに恐怖は抜けきれていないのだ。
震える両手を握り合わせ深呼吸をする。そうすると、精神が徐々に安定していき震えが治まる。
「起きた?」
「ひっ、」
耳元で聞こえてきたのは恐怖の元凶である幼女の声である。
他人の心を読むさとりの今のさまは心を読まなくても分かるほどに表に出ている。覚妖怪にしては情けない限りであるがそれも仕方が無い。
その事にすぐ気づいたさとりは慌ててポーカーフェイスを取るが全てが遅い。
「な、なっんでちゅか」
追い打ちをかけるように噛み顔がゆでダコのように赤くなるのが分かる。
「落ち着いて喋った方がいい、それとも席外す?」
アンは小首をかしげながら真顔で聞く。
それに、口で答えるのは不味いと首を物凄い勢いで左右に振りゴキっと痛々しい音が鳴る。
首を両手で抑え下半身に上半身を埋めるように悶える。
今までの事から分かるように実はさとりはかなりのドジっ子であり、いつもはカッコよく大人の雰囲気を作っているが次第にこうやっ

てボロが出始める。
「かなり気絶してたから身体が鈍ってる。もう少し寝てた方が」
「どれぐらいですか！」
痛い首を無視し幼女に飛びつく。
「太陽があっちに向けて動いた」
指を指した方を向きすぐに大まかな時刻を推測する。
山を降りここに来たのが太陽が頂上につく少し前ほど、となるとアンの話が本当ならば既に昼の時刻は終わり夕刻へのカウントダウンを始めている。
本来この仕事は午前中に終わらせさっさと帰宅し、最愛の妹とご飯を共にするはずだったが、今はそんな時刻とっくに過ぎている。
「急いで帰らなければ！」
身体にかけられていた掛け布団を弾き飛ばし立ち上がろうと足に力を込めるもピクピクするだけで、一向に力が入らない。
急いでこいしの元へ帰らなくちゃ！あの子料理が出来ないのに
頭は必死に足へ向け指示を送るがやはり動かない。いっその事這ってでも帰ろうと考え始めた所でアンが助け舟を出す。
「我の背中に乗る。我がかけた迷惑、我が責任を取る」
アンはさも心が覗かれていたのが分かっているかのような口調だった。
バレている……　やはりかなりの規格外。到底私たちの手で負える代物ではない。ですが、伝えることも叶わない…　いやまずそんな事より帰宅を…
小さい脚を折り背中をこちらへ向けて待っている。
「けれど迷」
「大丈夫我に任せて」
崖もない胸を右手で叩きエヘンと言いそうな表情になる。
全てバレている可能性は高く、どう転んでもいずれ住処がバレるのも確定的だ。
今まで必死に考えていた言い訳は無駄と化し、諦めの息を吐いてから大人しく小さな背中へ乗る。

それに、森の前で返してもらえば何事も問題はないだろうと考えたからでもあった。

徐々にこの身体に魂が定着し始めたのか幼女を一人背負っても身体は重くならず、逆に軽すぎるほど

――にしてもさとりちゃんには迷惑をかけたな。あの腰周りにあった眼？よく分からんけどアレで見つめられた後にすぐ倒れちゃったからなぁ……　本当に申し訳ない。その事について謝りたいけど、アレ何なのかわかんないから説明の方法がなぁぁ。

意外ではあるが、あの時初めて対面した時には腰回りを浮かんでいる第三の目を知覚していたのだ。

一つの眼球にそれを覆う瞼の代わりをしている謎の膜。そこから身体にくっつくように伸びている四本の触手。

色までははっきり見えないものの姿だけはバッチリ見えている。

今もなるべく当たらないように調整していて、胸部付近に漂う眼球がかなり気になって仕方がない。

「ここ右？」

「はいそうです、そこを右に」

どんどん加速していく脚は十分も経たずして森前へ到着する。

「ここまでで大丈夫です」

「ほんと？」

「はい、このようにどうにか立てますから」

強引に背中から飛び降り、生まれたての子鹿のように足を震わせながら返答する。

――いや、全然安心できないよ

その姿を見てロリコンマスターである俺が納得するとでも？否だ。それは断じてありえんぞ!!

首を横に一二回振り否定の意を表す。

「ダメです。本当にダメ」

必死に手を振り拒絶するもアンは言うことを聞かず、首を横に振るばかりである。
終わりの見えない問答を繰り返し始めた時だ、さっきまで静かだった森がざわめき始めたのは。
木々が風で大きくしなり、しまいには悲鳴をあげるようにギギギと音が聞こえ始める始末。
「まずい、彼女が来てしまった」
森の様子を見てさとりは瞬時に彼女が来たのだと察知する。
その予想は見事的中し、森の奥から一人の少女がゆっくりと歩んでくる。
風で靡く白く透き通っている髪。
夜闇で獲物を狙う狼のように眼光は鋭く、綺麗な顔には似合わないほど歪んでいる。
人間？と思ったがすぐにその意見は否定される。
頭に付いている狼のようにピンと立っているフサフサで尖っている耳に、威嚇しているのか逆だっている腰についてる尻尾。
人間とはかけ離れた姿を持ち、右手には椛が大きく模様されている小さいまん丸の盾。左手には鈍く輝く日本刀よりククリナイフのような特殊な形状の刀を所持している。
「貴方が目標ですね・・・ 排除します」
「待っ」
止めようと脚に意識を集中させた途端その場に崩れ落ちる。完治していなかった脚がこの時に限って悪化したのだ。
その隙に少女は脚に力を込め切り込む。
閃光が走る。
アンの視界から突然少女は消え、気づくと背後に現れ突然頬に小さなかすり傷が浮かぶ。
何が起きたのか理解する間もなく少女はまたも消える。
「ふッ！」
「まずい、目を目を防いでください！」
「うん」

倒れているさとりから指示が飛びその通りに目を両手で覆う。
ちっ、舌打ちが聞こえたような気がしたが風が吹きあれしっかりと聞くことが出来ない。
今度はゴスロリ服の特徴でもあった肌の大きな露出により、防御力皆無な右の二の腕に小さな線が走る。
肌は少し血で滲むも何事も無かったかのように傷が一瞬で消える。無論だが頬の傷も同様だ。
「再生能力ですか、やっかいですね。それよりもどう言う事でしょうかさとり様、なぜ妨害を？」
「ダメです！彼女は刺激していい存在ではない」
「そうですか。なるほど理解しました。が、だとしても私の目的は変わりません」
倒れているさとりに向いて話していたが、アンの方には隙は一切見せず依然として狙いを定めている。
さとりは自分の動かない脚に苛立ちを覚えながら、大声でどうにか止めようと説得を試みるが彼女はもうすでにさとりの声を遮断したあとだった。
「さて、突然の事で悪いのですが死んでもらえますか？」
「何故？」
「貴方はいちいち草を踏むのに理由がいるのですか？」
「拒否権なし？」
「えぇ当たり前です。それが私の目的でもありますので」
淡々と言葉を返す。まるで機械と会話しているようであり、感情を一切感じられない言葉ばかりだ。
左手を少し曲げ剣を地面と垂直に立て、二撃目の体制に入る。
「我戦闘の意思はな」
「問答無用!!」
質問に返答は返さず今度は突きを放つ。

絶体絶命天狗達!!怒れる無限の咆哮

初撃は皮膚の硬度にはばまれダメージはほとんど見られず、切り裂きは無駄だと判断した。
ならばと一点集中の突きに移る。
準備運動だと言わんばかりに初撃よりも数倍早い速度で動く。
突きにかなりの速度が追加されたそれは本来ならば一溜りもなく、上級妖怪であっても当たりどころが悪ければ死もありえる。
が、肉に当たるも剣先数センチが軽く刺さるだけで、肉を抉る事は出来なかった。
「くっやはりか」
「痛い」
突きが効かないと分かってすぐ距離を離す。その時も脳の動きを止めることは無い。
上級妖怪以上!いや、大妖怪大天狗様達と同等かそれ以上と判断した方が懸命か・・・
数少ない攻防から瞬時に推定力量を判別する。その予想からより一層気合を込める。
私の目的は死んでも大量の情報を得ること。ならば、さらに速度を上げるだけの事!!
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
数メートル離れるとすぐに瞬間最大加速をする。
地面に小さいクレーター作りその加速の速さを意味する。もはや心を読んで動きが分かっているさとりですら、目で追えていない。
押し切る。叩きつける。同じ場所を擦切る。刃を水平にして切る。妖力を纏わせ切断力を上げ切り裂く。力任せにランダムに斬撃を放つ。
ことごとくその全てが失敗に終わる。技術による攻撃を出し尽くした少女はカウンターを恐れ離れる。
「刃が通らない」

「我に攻撃の意思はない。だからいますぐ止めて」
息を上げ驚愕を露にしている少女に向け、両手を開いて戦闘の意思を無いことを示すが手を止めることを選択はしない。
なんでそこまで君が
少女は歯ぎしりし、柄を掴む手にさらに力を込める。
戦闘の意思がないならば好都合だ。全身全霊をぶつけてやると、一度深呼吸して大量の空気を吸収してから再度加速する。
彼女の本来の仕事は山へ来た人間を追い払う事であり、中には払いにくる陰陽師がいるのでそいつらを殺す事が常である。
そのさなか少女は技術よりも速さをより重視していた。
女であるせいで男以上の筋肉がつかない。
大妖怪の烏天狗とは違い種族は白狼天狗。翼すら無い中級の妖怪。
理由はその他にもあるが大雑把に言えばその通りである。それで今の速さを意識した戦闘スタイルへとなっていた。

より早く、より夙く、より疾く、より捷く、より速く

より迅く

自己暗示をかけながらアンの周りを四角く囲むように駆ける。
自己最高速度を遥かに超え、自分自身ですら今身に起きている事が理解出来ていない。
風になった？
そのような錯覚に陥るも、すぐ自我を取り戻し方向をアンに切り替える。
速度は既に音を捨て光を置いていく。
風で舞う木の葉はすべて空中に止まって見え、さとりやアンの瞬きがゆっくり見える。
放たれるは同じ箇所に同時に襲いゆく八撃。一撃を回避しようとも七撃が襲い回避不能の攻撃にして、必勝の一撃でもある。
すでに視認をすることは不可の移動速度から放たれ、アンの腰から

赤い鮮血が舞う。
「なん・・・ だと・・・」
だと言うのに切り裂いた本人は驚愕の声を上げる。
理由は手に残る異様な感覚だった。
肉を切った感触はなく、あるのはまるで木の棒で大木を全力で叩いたような物だ。
その上左手が切り終わった後に唐突に軽くなっている。
恐る恐る視線を移すと、刀身が砕け散り柄だけが虚しく手元に残っている。
正真正銘の全力全開で放った必勝必殺の一撃は無駄と終わった。
「なんで我に？何かした？」
「くっ、まだだ！この腕がある限り」
「待ってください!!」
柄を投げ捨て今度は拳を握り攻撃に移ろうとした時、足の震えが完治したさとりが両手を広げアンの前に立ちふさがる。
「そこをどいてくださいさとり様!!」
「これ以上はさせません！」
「そこをどけ・・・ そこをどかないと私が死ねないんだアアア!!」
邪魔をするならそのまま貫くと拳を開き、手刀の形にして前方に穿つ。
「今なんて言った？」
さとりを貫く寸前止めたのは先程まで攻撃の意思はないと宣言していたアンだった。
眼は大きく開き、感情の感じられなかった過去の言葉ではなく、明らかに苛立ちが込められた言葉。
手刀の右手首をがっしり掴んでいる手の力が徐々に上がる。
「いたっ」
「どういう事、死ぬ？なんで？理由を聞かせて」
みるみる握られている部分は赤くなり、慌ててさとりがアンに声をかける。
「私が説明します！なので手を離してください」

「あっ、ごめん」
「はぁ・・・ はぁっ・・・」
謝るも本人は謝罪を受け取れるほど精神が安定していない。
ぶつけられた本気の殺気は大妖怪以上で、心臓の鼓動が加速し血が異常な速度で駆け巡る。
呼吸も安定しなく胸を抑えその場へ崩れ落ちる。
自分のせいだと分かっているので駆け寄り、背中をさすりながらさとりの話を聞く。
「分かっていると思いますが、私達は妖怪です」
――嘘だろ？なんで知ってる体なんだよ!!てか本当なら俺喰われちゃうんじゃね？
普通に衝撃的な告白に内心焦りまくっているが、ポーカーフェイスは崩れること無くさとりに心の内はバレない。
「三日ほど前山にて霧の妖怪を一撃で瀕死寸前まで追い込みましたね」
「・・・ ？・・・」
「その顔は覚えていないと・・・ なるほどあまりにも格下だったから記憶にすらないという事ですか」
一人でに納得し頷きながら化け物感を改めて理解する。ちなみにアンはあの霧が妖怪の仕業だったと気づいてすらいない。
「話は脱線しましたが、結果としてその事から貴方への警戒態勢を上げ、力量を把握する事を目標としました。
心を読むことの出来る私に、死を賭して力を図る彼女犬走椛」
「死を賭して？」
「えぇ、彼女の上司である避難してきた全妖怪を保護している烏天狗達が命令したのです。死ねと」
自分でも気づかない内に身体に秘められた魔力が怒りにより噴出されていた。
目の前のか弱い？少女に対して死ねと命じた奴がいる。それだけで途方もない苛立ちが湧き上がり、握る拳の力が増す。
怒りに顔を歪めそうになるもどうにか気合いで耐え、少し震え声で

聞く。
「そいつらはどこ？」
「大天狗ですか？それなら山の頂上に」
「殺す」
怒りに満ちたアンは地を砕く勢いで飛び上がり、一瞬で山頂まで行く。その時の顔は般若のように変貌している。
あっ、やばいと気づくのは姿が消えてから数秒たってからだった。

呑気に大天狗達は作戦の成功報告を待っていた。
その裏に一人の少女の死がある事など忘れたような、いつもすぎる光景。そのせいで空から飛来する物体に気付くことは無かった。
山の山頂に建てられた城。
安全性を考慮し土台は石垣で、その上に木をガッチリとハマるように削り組み上げられている。
下の人間達からは見つからないように風の結界で覆い姿を隠蔽している。これの応用でさとりの眼を隠している。
遥か上空から落下してくるそれはまるで城が視認できているかのように、狙いを定め城へ突貫する。
直撃後すぐに城は倒壊を初め、瓦礫とともに大天狗達や下級妖怪達が空へ投げ出される。
「なにが!!いやそれよりも、全員風の力で保護をしろ！」
「「「了解!!」」」
大天狗達は懐から取り出したもみじ型の黒いうちわを取り出し、自然落下していく妖怪達に向け風を仰ぐ。
風は妖怪達を包み込み落下速度を急速に落とし、怪我のないようゆっくりと地面へ下ろす。
大天狗達は背中にある黒い鴉のような一対の翼を羽ばたかせ砂埃立てずに地面に着地する。
「情報は！」
「何も分かりません」

「同じく」
「こちらも」
「おなじー」
　五人とも何が起きたのか理解出来ず、辺りを見渡し情報を探すも何も見つからない。
　強いて言うならば崩壊の直前膨大な魔力の塊が降ってきたということ程度である。その直接的な理由などは一切不明。
　攻撃を受けたにしろ姿の見えない城をなぜ狙えたのかすらも分からない。
「お前が大天狗か？」
　崩れて山積みになっていた瓦礫が一気に飛び散り、現れたのは不気味な雰囲気を纏っている幼女だった。
「風の防護壁を張れェェェェェ!!」
　アンを見て驚愕のあまり停止していた他の四人も、怒声に途端に意識を取り戻し先程のように風を仰ぐ。
　吹き荒れる風はアンの前に何枚も何枚も薄い膜を張っていく。膜が積もりに積もり障壁となる。
　妖怪のトップクラス大妖怪と呼ばれる存在である大天狗五人の全力の障壁は、圧倒的硬度を誇り他の大妖怪であっても突破は不可能だろう。だと言うのにアンの表情はピクリとも動いていない。
　余裕があると言うのか!!ならばさらに重ねて!!
　動かない表情から余裕があるのだと考え、既に十分である障壁をさらに強固にしていく。
「いつまでその表情で」
「邪魔」
　少女はゆっくりと右手を上げ虚ろで光が消えた瞳で障壁を見つめ、身体の底から溢れる魔力を撃ち放つ。
　突破不可能とされた障壁は物の見事に粉砕され大天狗達はその現象に絶望し崩れ落ちる。
「馬鹿な・・・」
「弱い。そんなんでよくも命じられた」

「何者なんだお前はァァ!!」
顔を上に見上げ、空中に浮かび上がり始めた幼女に叫ぶ。
それを幼女は見下しながら、
「我はオーフィス、無限を司る龍神なり。お前は我の逆鱗に触れた」
手のひらに野球ボールぐらいの魔力の圧縮体を作り出し、手首だけを捻り投擲する。
「黙ってやられるかぁぁぁぁ!!」
リーダー格の俊巍(しゅんぎ)は自分に飛来する球体を躱し、ここで戦闘すれば他の妖怪にも被害が及ぶと離れようと足を踏み出した時、腹部を何かが貫通する。
「ぁっ・・・ か・・・」
球体が急旋回し腹部を貫いたのだとすぐ理解するも、大量に流れ落ちる血にその場へ倒れ込む。
肩で息をしている俊巍にオーフィスはゆっくりと歩み寄り、右手を前に差し出す。
「遺言は?」
「私・・・ 以外の妖かっぁ・・・・・ いを助けてぇくれ」
「なぜそれを今言う!!!!」
椛には死ねと命じておきながら、今は他を助けてくれなどとあまりにも矛盾した事を言い放つ男に、怒りが収まらず声を荒らげる。
周囲に何十何百と魔力の圧縮球が展開され、余命のカウントダウンを始める。
「死ね」
球体をいざ放ち殺そうとした瞬間一陣の風がオーフィス撫でるように吹き、視界の先に男を覆うように椛が立ちふさがる。
「やらせません」
「何故、そいつらは死ねと命じた。そんな奴をなんで助ける?」
「大天狗様達は私達弱い妖怪の味方。陰陽師に払われるしかなかった私達を命懸けで守ってくれた!!だからこそ私は命をかけてでも助けます!!」
広げていた手は弱々しく閉じていき、魔力球も消えていく。

光が消えていて瞳に光が戻っていき、周りの惨状が視界に飛び込む。
妖怪達は瓦礫に襲われ血を流しながら倒れていて、優雅な城はその形を欠片も残していない。
「我は何を」
そこでアンの意識は途切れた。

幼女との対面。ゴスロリ痴女の正体とは!!

そこは暗闇であった。
一寸先は闇。光はあらず、這いよる闇のみ。
太古の人間が恐れた闇。結果として明かりを灯りを求め火を得た。
そんな中ふわりと浮かんでいる一人の男は何故か安心していた。
闇は恐怖の象徴であるはずなのだが、と首を傾げながらただ漂う。
何をする訳でもなくひたすらに動かない。
「やっとここまで来た」
突然聞こえてきたのは聞いたことのない声ではなく、ここ最近ずっと聞いていた声だった。
どこにいるのかと辺りを見渡し始め、一筋の光を見つける。
夜空に光る一番星のように小さく眩しく輝く光が。
手を伸ばす。
理由はない。ただ伸ばさなくちゃと思っただけだ。
「まぶっ!」
どうにか届き握りしめると猛烈な光が目蓋を閉じさせる。
目蓋を閉じても眩しかった光はすぐ収まり、ゆっくりと目を開く。
開いた当初は目がまだ慣れておらず白しか見えていなかったが、次第に視界が安定していき十秒もすれば完全に視認できていた。
「君は・・・ アン?・いや、あれはさとりがつけた名前だったか・・・・・ となるとなんて呼べば?」
視界の先に何もせず佇んでいたのは黒髪の人形のような幼女だ。
スラッと伸びたきめ細かい指や腕、少し衝撃を加えれば折れそうなか細い足。
清楚そうな見た目に反し服装は胸元がモロ出ていて、二つの山の頂上には黒いバッテンがどうにか重要な所を隠している。
破廉恥極まりない服装だが、その声その顔は知っている。
「我の名はオーフィス。無限を司る龍神。またの名をウロボロス・ドラゴン」

左右の足を交差させ、身体を仰け反らさせ手を顔の前で交差させている。その時顔は相も変わらず無愛想な真顔だ。
「えっと……何それ？」
「ジョジョ立ち？イエスがこれをやればいいって言った」
あぁ… 若い子達の間で流行ってたな確か。漫画を読む時間なんかなかったからなー。
突然のことにイマイチ状況が理解出来ず、目を白黒させる。なんと返せばいいか分からず二人の間には静寂が訪れ、慌てて話題を振る。
「オーフィスちゃんだっけ？ここが何かしってるかな？」
「ここ？我の中。日に日にシンクロ率が上がって、ここまでの深層にやってこれた」
ポーズを解き淡々と語る。
その言葉は何処か他人事のように聞こえる。
さて、彼女は多分てか確実に今の幼女さんだよな。服は多少違うけど……
「身体を貸してもらってるって事かな俺は」
「違う。我の身体をお前にやった。イエスとそう言う契約をした」
「契約？」
幼女が使うには分不相応な言葉に思わず聞き返す。すると、小さく頭を縦に振り契約について説明を始める。
「我は静寂を望む。イエスはそんな我に静寂を与える代わりに、身体を欲した。だからやった」
「なるほど」
うん分かった。直訳すればイエスはロリコンで変態の鬼畜野郎って事が。
一柱風評被害を受けたのだが、それはオーフィスや彼の知るところではなく気に止める人はいない。
と、そんなふざけた事を思考している場合でない。オーフィスの言葉には、今の俺の状況も含まれているのだから。
身体を手に入れたイエスは俺をその身体に入れた。そこで一つの疑問が生まれる。

何故俺はオーフィスの身体に入ったのかである。
そこに関しては俺がひたすら考えても答えに辿り着くことはありえない。それこそ算数を教わっていないのに、三平方の定理が解けるぐらい頭がいかれてない限りは。
「じゃあ俺はなんで君の身体に？」
「教えられてない？」
「問答無用で何の説明も受けてないね」
「なら説明する」
よろしく頼むと小さく頷くと、両手を正面でぶつける。
パン。小さな肉と肉のぶつかる音の後に三つの人形が現れる。
それぞれに明確な特徴はなく全員が五頭身の黒い人形で、辛うじてわかるのは胸が無いので男であろう事だけだ。もし、胸のない女性がいた場合は素直に謝罪をする。
人形はくるくると回り始めそれぞれが別々に行進をその場で行う。
「我の世界には異邦人（イレギュラー）たる転生者が三人いる」
「三人？それって俺含めて？」
「そう、だから残るは二人」
一体の人形はオーフィスに握りつぶされ、それに我関せずと動いている二体のうちもう一体も握りつぶす。
「もう一人は問題は無い。あるのはこっち」
黒かった人形は危険を示す赤へ染まる。
「こいつはイエスの力の半分を奪った。理由は分からない。ただ、こいつは神の力を持った人間って事だけ」
「まじ？」
「まじ」
大体見えてきた。大方俺が代わりに奪い返せ的な感じだろう。
一応そこそこの年齢を生きた彼には、ある程度の予想がこの段階で立つ。
「世界を直接同行出来る訳では無い？よく分からない。我には出来ない仕事？らしい」
「なるほど、それで俺か・・・」

「分かった？」
「もちろん！」
　具体的な理由は本人に聞いた方が良さそうだな。多分オーフィスちゃんもあまり知らされていないみたいだし。
　あぁそうなると俺以外の転生者を探さなくちゃいけないのか・・・腰が折れそうだな。
「けど、今のままじゃ勝てない。だから我の力を全部託す」
「え、」
「無限たる我の力の使い方、制御の仕方、知識。全部」
　呆気に取られている合間にもどんどんオーフィスは捲し立て、脳内で整理できないほどの情報を渡してくる。
　オーバーヒート寸前の脳からはプスプス煙が立ち込めている事だろう。
「待てよそしたら、君は」
「我？無限の静寂を得る。我が待ち焦がれていた事」
　オーフィスはさも当然のように言い放ち、何もおかしな事が無いだろ？っと言いたげな表情だ。
　ダメだ！と言っても今の彼女は聞かないだろう。それに、無限とは寿命も含まれているのであれば、その見た目ながら俺より長い時を生きている可能性もあるのだ。不死とは辛いとよく聞くのでおかしくはない。
「それでどうすればいいんだい？」
「簡単少し屈んで」
「こうか？」
　両膝を折り視界が一気に縮む。
　小さい彼女の顔の位置と丁度同じ高さになり、綺麗な黒い瞳がこちらを見据えている。
　ごくり。ただ見つめているだけだが自然とつばがこみ上げる。
「じゃあそのままで」
「うっんっ！」
　と、オーフィスは身体を前に倒し薄い桃色の柔らかい唇が、カサカ

サに枯れた男の唇に重なりすぐ離れる。
彼女の口は何かを告げようと動くが、幼女からのご褒美に鼻から出る愛を抑えるのに必死で聞くことは出来なかった。
「なにがいづだ？」
「別に何も」
「ぞう・・・ ずぅぅん・・・ それじゃあそろそろ行くね」
力を貫った今、あちらの現実世界から呼び覚まそうとする声が聞こえてくる。
周りの闇も消え始め、この場所の崩壊が進んでいる。
「元気でねオーフィスちゃん」
「分かった」
随分と簡素な返事だが彼女にはそれが精一杯なのだろう。なれない表情筋を動かしながら不格好な笑みを作る。
下手だな笑顔。まぁ言わないけど。
内心ギャップに笑いそうになるのを抑えながら、身体は粒子となり消えていく。

一人残された幼女は天へと登る粒子を見ながら、さっき呟いた言葉と同じ言葉を呟く。
「我の英雄（ヒーロー）」
後に知ることになるが、自分が選ばれたのは偶然ではなく必然であった事を。
そして、男は無限を引き継ぐ。

夜の二人きりの宴

目元に光が差し込み自然と目蓋が開く。
視界に飛び込んできたのは見たことの無い木製の屋根。その次に辺りを見渡しここが何処かの部屋なのだと理解する。
―うーんここはどこだ？全く知らないところだけども……
「やっと起きたか」
背後から優しげな声がかけられ後ろを振り向く。
小さな小窓に腰を置きながら外を眺め、自分の傷口を撫でている老けた男がいた。
髪は年相応の白髪で、顔の至る所にシワがあり今までの人生の苦労が伺える。だが、そのすぐに男の正体を知り険しい表情をする。
「大天狗」
「知ってたか… それと、それ種族名だから名前は他にあるぜ」
「興味ない」
腰から生えた一対の黒い鴉の羽に、肩についている赤く伸びた鼻が特徴的な面。白、黒、緑の順番で羽織られ和服が印象的だ。
天狗なのはすぐに分かったがもしかしたら他の種族かもしれない。それでも口から零れたのは『大天狗』だった。というか、それ以外の種族を知らないので当てずっぽうである。
「と言われても無理やり言うがな。俺の名は朧花(ロウカ)よろしく頼むぜ。にしてもよく分かったな。普通こう言うのが顔だって思うだろ？」
肩のお面を人差し指で触れながら質問する。
「昔よく見た」
「なるほど」
―まぁ昔ってか前世？なんだけどね。口下手な今だとこれが限界だからな。
朧花は会話に行き詰まったのか外の風景を見る。
その姿には何処か儚さがありその姿を見ていて突然思い出した。思い出したと言っても微かな記憶であり、あの時は一時的に暴走して

いたせいで記憶にはほとんど無い。
「ここは城？」
「いいや違うぜ。城はあんたに破壊されたからな。ここは離れにある名も無き神社だ。証拠にほれあそこを見てみろ」
外を指差しそちらの方を見ると真紅の大きな鳥居が構えている。鳥居の向こう側には階段が下へ続いていて、何処か山の麓なのだと分かる。
現代でもほとんど見ることの出来ない綺麗な鳥居はそこにあるだけで、アンの心を虜にする。
「すごい」
「なんだ、綺麗なものに感動できる心はあるのか」
「失礼」
「そうかそうかすまんねぇ」
軽いおちゃらけた謝罪をしながら窓枠に置いてあった小さな椀を掴み、中に入っている液体をちょびっと飲む。
外から風がなびきその液体の匂いがアンの方へ流れていく。
匂いは嗅ぎなれたアルコール。その質は明らかに高く、何処か甘さも感じるいい酒である。
「酒飲んでる」
「そりゃ飲むさ、せっかくの宴なんだからな」
その言葉通り外からはどんちゃん騒ぎする音が聞こえる。
大きな声や太鼓を叩く音。自然界ではありえない動きをする火や水。異常な程に明るい階段下。
どこか懐かしさがあり、子供時代の縁日に近い。
「なんで？城が壊れたから？」
「はっ、壊れて喜ぶヤツがどこにいるよ…　こりゃ妖怪の性ってやつだな」
「性？」
椀に乗っている酒を一気に飲み干し、一息ついてからオーフィスの方へ身体をしっかり向ける。
「ここには多種多様な妖怪がいる。今じゃ正確な数は分からないほど

にな。
だからこそだ、そうなりゃ確実に喧嘩や暴動が起きるんだわ。どうにかそれが収まっても遺恨が残ったまんまだと後味悪いだろ？一緒に生きていくってのにな。
そこでだ。俺ら妖怪は何か事件が起き解決したら、宴をする。酒を飲んで笑って恨み辛み憎しみ全てを流すのさ。これもその一つだ・・・だからよ飲めや」
空の椀を差し出す。
受ける取るべきか、受け取らないべきか。そんな事を考える前に身体は勝手に動き、椀を受け取る。
殻の椀を受け取り酒を入れろとコールをすると、笑いながら注ぐ。
「かっかかか！いいねぇ！そうでなくちゃ!!」
「酒に罪はない」
椀はアンの手ではかなり大きくピンと開いた手のひら程あり、突然注がれた酒に落としそうになるが何とか堪える。
「危ない」
「すまんすまん！さて飲む前に一応聞いておこうか、名前はなんて呼べばいい？」
「アン」
即答だった。
疑問に思う余地もない。確かにこの身体の持ち主の名前はオーフィスだ。
しかし、俺の今の名前はさとりから名付けられたアンなのである。それだけは揺るがない事実だ。
「そうかいなら、アン乾杯だ」
「乾杯」
二人はそっと椀を近づけぶつけ合わせる。
カラン。木と木のぶつかる乾いた音の後に一気に口へ含む。
鼻を抜けるアルコールの香り。口には溢れんばかりの旨み。喉にはきめ細かい液体がツルと入っていく。
並の安い酒ではなくかなり上等な代物だ。

「美味い」
「だろうて！俺の最高作だ」
「作った？」
「当たり前だ。当主としては情けない趣味だが、これだけは止められねぇよ。自分で作った酒で、この満天の星空を見るのはな」
背後の小窓には満天の星が輝く。
あぁ確かに最高だ・・・これは。
否定の余地のないツマミに酒は進む。
「もう一杯か？いいぜほれ」
「お前は許さないけど、酒は美味い」
「褒め言葉として受け取っておくよ」
二人の間に何か会話があるわけではない。何せ命を奪いかけ奪われかけた本人だ。
いきなり仲良くしろと言う方が無理であり、許せというのも不可能だ。
そんな二人が何か文句を言うわけでもなく酒を飲む。酒に向き合い空を見る。
あまりにも不格好なその光景はいつまでも止まることなく、夜遅くまで続いていった。
その時に声を盗み聞きしていた少女はその光景を見た後、すぐに白髪を月光に照らされながら宴の方へと足を運んでいく。

酒は飲んでも呑まれるな!!

一晩があけ前夜の祭りが嘘のように出店の片付けは完璧に終わり、いつもの静寂が戻りつつあった。
それでも旧城の跡地では河童の妖怪が総指揮を取って修繕に励み、木の切る音などが森中に響き渡っている。
そんなおり、白髪を怒りに揺らしながら廊下を駆け足で歩む椛がいた。
「あやや?どうしたのですか、そんなに急いで椛ちゃん?」
「文様。今はお馬鹿二人のお叱りの時です」
腰に生えた一対の黒い羽を羽ばたかせながら空に身体を寝そべらしながら、椛の上司たる射命丸文は気だるそうに声をかける。
一見大天狗に思える風貌ではあるが別の種族である鴉天狗なのだ。
そんな彼女だが、昨日の宴の時には実の父親が椛を見捨てようと発言した事を知り、説教という名の喧嘩をしていた。
そのせいでいつもは行き届いている髪や服が少し乱れている。
ピンと上にはねた髪を手ブラシで直しながら椛の後を続く。
怒りにまかせ廊下を踏んでいるので一歩進む事に木が軋み悲鳴をあげる。そんな事お構い無しに進み閉じられた障子を吹き飛ばす。
「何をやっているんですか?」
「何って… しゃけにきまれるらろ?」
前に吹き飛ばされた障子は小窓を突き破り外へ飛び出る。その際に床に転がっていた大量の酒瓶を粉砕し、畳一面をガラスの破片で埋め尽くす。
元の数が以下ほどだったのか、そんな事分かりはしないがこの惨状を見れば一目瞭然だ。
当主たる風格の一切ない朧花。服は一番下の白の布地だけであり、それも酒を浴びていて地肌が透けている。
オーフィスは服の異変は何も無い。が、それ以外の変化が著しい。
「げふっ… 椛何してる?早くこっヒック… ジャンケンを」

自分の手と同じぐらい長い酒瓶をラッパ飲みして飲み干し、口の横から酒が流れ落ちる。
呂律はかろうじて回っているも、明らかに様子がおかしい。言葉が支離滅裂で理解が一切できない。
酒蔵から相当数無くなったと聞いて不安になってきたが・・・ まさかこうなっているとは。休日なのに出勤することになりそうです。
一体何を呪えばいいのか。休みを堪能することなく終わりそうな短い休日に別れを告げる。
「さて、何をしたか分かっていますね」
「何？我ジャンケンしてただけ。ジャンケンぽい・・・ 我の勝ちヴィクトリー。ところで今日のパンツは何色？」
「く・・・ そうですか。ええ分かりました・・・・・ いい加減に目を覚ましてくださいィッ!!」
酔いが覚める気配のない二人の頬にビンタをかました後、すぐに背を向け出ていく。
叩かれた二人はその場所を触れながら畳に座り、消えいく背中を眺める。
「随分とらしくないですねー。あの豪酒で知られる朧花さんが、こんな簡単に酔うなんて。それに龍は酒が好きだとも聞いてますし」
文はさりげなく小さく畳まれた白い紙を取り出し、右手には墨が内蔵されたポールペンもどきを持ち情報を記載していく。
今の頭の中には、
【号外!!あの大天狗が幼女に手を出した!?】と題名を打って、自作の新聞『文々。新聞』を売ってやろうと算段を立て始める。
「あの程度で酔うわけがないだろう」
「全くその通り」
いつもの威厳のある態度に戻った朧花はため息混じりに否定する。隣の幼女は首を縦に振る。
先程までの状態が嘘のように変わってしまった二人はゆっくり立ち上がり腰を回す。
「あの子には随分と迷惑をかけたからな。少し打ち解けようと思った

んだが・・・　フラレたみたいだ」
「当たり前。アプローチが悪い。次は我がやる」
「そうかいそうかい。なら任せるよ」
その言葉に嘘偽りはないのだろう。言葉には確かな芯があり、嘘だとは到底思えない。
のだが、二人の震えている足を見るとどうもその言葉を肯定することは出来そうにない。
あやや・・・　どうしましょうか。あんまりいいネタにもなりそうにないですねー・・・　いつも通り盛り（捏造し）ますか
何も収穫はないと切り捨て次のネタ探しに文はその場から飛び去っていく。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

酒を飲むのを止めてから一時間。次第に酔いは取れていき、二日酔いにはならずにすんだ。
首を軽く回しながら城跡地へと足を向けていた。
自分が怒ったせいで壊してしまった惨状は見なくてはいけない。そう考えているからだ。
「おや?あなたのような人居ましたか?」
「?・・・　我の事?」
「そうですよ、うーーん見たことのないような・・・　まぁいいか!手伝ってくれるのですよねここに来たのなら」
青髪を緑色のキャップで押さえつけている幼女は忙しなく手を取り羨望の眼差しを向ける。
腕の至る所に泥がついている上に、首から下げられているメガホンは凸凹に変形している。
「あぁ!!そこの青坊主さん、その木材は反対側です!!そっちの化け狸さんも同じです!!」
背後を見てとつぜんメガホンを口に当て大声を発し、その指示通りに瓦礫を持っている二人は動いていく。
と、言うより作業を手伝っているのが二人しかいない。

スキンヘッドで体格は朧花よりもふた回り以上大きい男、青坊主。
小さいながらも意外に力持ちな化け狸。
以上の二名だけが城の復旧作業に手伝っている。
「人手がすくないんですぅぅ!!助けてください!」
猫の手でも借りたい。そんな面持ちの彼女は逃がしまいと強く手を握りしめる。
見たらさっさと帰ろうとしていたアンだったが、幼女の献身的な説得に心打たれ手伝う事を決意する。
「分かった手伝う」
「ほんとですかァ!!よし!これで作業がもう少し進められる!!」
意図しない増援にガッツポーズを取り、すぐさま仕事を与えようと完成予想図を開き段取りを確認する。
けど、少ないな… 俺含めても三人。これじゃあ間に合う物も間に合わない……。 となればアレを使うか。
オーフィスより托された記憶の中にこの状況を打開できる方法があり、実行に移すため近場に転がっている小石を集める。
指示をする前に動き出したオーフィスに首を傾げ、声をかけようとした時、突然オーフィスが自分の腕を掻き切る。
「な、何を!!」
傷は持ち前の再生能力ですぐに塞がるも、数滴小石の上に垂れる。
気でもとち狂ったのか?そう考えたがすぐにその考えは撤回する。
血を浴びた小石がひとりでに浮かび上がり、内側から肉が発生し肉体を生成していく。
全長三メートル程に成長し、背中には大きな空を切り裂く羽。口は長く、爪・牙は尖っている。
その姿はまさにミニ龍。それが五体も出現した。
「ふぁっ… 妖怪を作った?」
下級の妖怪の河童である河城にとりですらも、ミニ龍一体一体が上級妖怪以上の実力であると感じる。
妖怪を作れる妖怪など大妖怪と評される大天狗ですらも不可能な領域。

そんな事をいとも容易く行った目の前の幼女は何者なのか、怪訝の目を向ける。

妖怪大集合!!!会議始動!!

何度目の朝だろうか。視界を白く染め上げる暖かな光が注ぐ。
開いた小窓からは涼しい風が吹き、髪を揺らす。
「すぅ……　すぅ……」
「やはりまだ寝てましたか。あらかじめ予定は伝えていたはずなのですが」
予定起床時間からはゆうに過ぎてるのだが、今だ小鳥のような寝音を立てる幼女の前で椛は頭を抱える。
起きていなければ美しいですね。このままにしておきたい所ですが、起こさなければこの後にも支障がでるので。
心を鬼にして幼女を包んでいる掛け布団をむしり取る。
「はぁ…　全くまた裸で寝ていたのですか」
掛け布団を失い、寒そうに身体を縮こませる素っ裸の幼女は数秒後にゆっくり目を開ける。
「おはよう」
「えぇ、おはようございます。先日言いましたよね？お仕事があるので起きてくださいと」
「そうだっけ？」
「そうです!!」
アンは覚えていないが、ミニ龍の協力により城は復旧予定の一年を大きく縮め、五日で完成へと導いた。
予定より早く終わったおかげで朧花の考えていた会議も急ぎ執り行われる事になり、それにアンも参加を命じられていた。
なので早く起きて午前中からある程度話をしようとしていたのだが、生憎寝坊姫がいたのでそれも頓挫。出来ることは今はたたき起こす事のみである。
「これから会議ですよ。早く来てください」
「我着方分からない」

「分かりました。私が着せますので取り敢えず下着をつけてください」
「おっけー」
床に転がっている胸当てと純白の布地。両方をおもむろに持ち上げ装着している間に椛は丁寧に畳まれた衣類を広げる。
黒が身体の大部分を覆い、その隙間から見える白いフリフリは全体の不気味さと合間り美しく見える。帯は黒と赤の線が交差し身体を一周する。
袖は長く手をすっぽり覆うが、スカートに形を変えられた裾は膝上にされ太ももふくらはぎを大胆に魅せる。
そのため、足用に白く長い靴下が用意されていてそれを履かせる。最後はシンプルな黒い下駄を履かせ、全ての用意が終わる。
「これでよし」
「う、終わった?」
「さぁ行きましょう。ご飯の用意が出来ています」
眠いまぶたを擦り、背中を押されながら食事へ向かう。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「ごちそうさま」
シンプルな焼き鮭に白いご飯。ワカメ豆腐の定番な味噌汁を食べ終え箸を置く。
「私もだ」
眼の前で食事を終えた朧花も手を正面で合わせてから箸を置く。
食事を終えた事で団欒する時間は終わり、急ぎ会議へ向けての準備をしなければならない。
「アン、分かっているな。これから行うのは妖怪の今後に関することだ」
「わかってる」
「ならいいが、くれぐれもふざけるなよ」
その声言葉には酒を飲んだ時のようなおちゃらけさはなく、完全な仕事モードへと切り替えている。

身だしなみも完璧に整えられていて、当主としてはここだけを見れば問題ないと太鼓判を推せる。
妖怪の今後か・・・ 俺関係ないような気もするけど仕方ないか。
自身の正体、無限の龍神である事を知ってから三日間の謎も解け安心するのと共に、もう人間ではないのだと改めて実感することになった。
それで疑問なのが龍なのに妖怪?となっていて、何処か関係ないような気がしていた。
「彼女には声をかけたか」
「昨日言ったから大丈夫。多分会場の準備をしていると思う」
「そうか、ならいい。行くぞ」
簡単に確認を終え立ち上がり、首を数回回してため息を漏らしながら城へ向かう。
黒い羽はピンと横に伸び、空を切り裂きながら空へ浮かび上がり空を進む。
アンはそれについていくのだが、空を飛べるほど魔力操作は完璧ではないので、空気を圧縮し足場を作って踏みしめながら空を走る。

地上とは違い混雑がしていないので、ほどなくして城へたどり着き、最上階天守閣へと窓から足を踏み入れる。
「お、やっと来たか。たく開催者が時間ギリギリかよ」
「すまんな厳。こやつが寝坊してな」
「へーそいつが・・・ まぁいいや早く始めろよ」
アンの事を興味津々で見つめた男はさっさと始めるように急かし、空席の二つの席へ進み椅子に座る。
「それでは第一回会議を始めよう」
朧花の重々しい言葉と共にその場にいる八人全員に気合が入る。

妖怪社会初の会議に何をしていいのか分からず、始まったものの言葉は一切交わされず口を閉じている。
それを良くないと思った司会の朧花は立ち上がる。

「初めての会議だ。知らないものも多いだろうから、自己紹介から始めよう。
私の名は朧花、種族は大天狗だ。今回はこの会議の発案者という事で、司会進行を務める。よろしく頼む」
簡潔に重要なことを詰めた自己紹介を終わらせると、先程の男の方に指を指し着席する。
俺かよと指を自分に指した男は髪を掻きむしりながら席を立つ。
「あぁ、俺の名は巌(ガン)だ。種族は八岐大蛇・・・ 他には特にねぇな」
海のように透き通った青の髪で、瞳を蒼眼に輝かせる。頬には大きく引き裂かれた古傷があり野蛮さを引き立たている。
服は殆どはだけていて、胸元のシックスパックをガッツリ見せ、袖は脱ぎさり腰の帯のところで髪色と同じ和服は折れ、床に袖が張り付いているように倒れている。
その巌と名乗った男はは自身の種族を八岐大蛇と語る。
八岐大蛇とは日本最古の龍にして、日本最強の妖怪兼龍である。
その強さは神すら手を焼き、悪逆の限りを尽くした彼の父親は酒で眠らされた所を須佐之男命に殺された。
神を恨んでもおかしくない所だが巌は別段恨んでおらず、ひょうひょうとしている。
適当に自己紹介を終わらせ着席し、隣の淡い赤色の髪の幼女さとりが立ち上がる。
「私の名前は古明地さとりです。種族は覚妖怪です」
深く語らなくても彼女の噂は全妖怪に行き届いているので軽く終わらせ、着席する。
すると、隣の男は面倒くさそうに立ち上がる。
「あぁ・・・ 俺の名は・・・・・ 森(シン)・・・ 種族は、ふぁっ・・・ ダイダラボッチ」
病的なまでに白い髪に白い肌。目元には白い肌のせいでより濃く見える黒い隈。
眠そうな表情の彼はどこかいやいやそうである。そうなのだが彼の種族は驚くべき事だった。

ダイダラボッチとは本来巨人であり、詳しい事は不明だが山や川などを司る自然の神が派生したとされ、草木があれば永遠に生きている存在だ。
しかし、人間は発展のために木々を草木を刈り取っていくので、永遠に死んでいるともとれる。不気味さで言えばトップクラスの妖怪である。
「どこかであった？」
「いや、初めてだよ」
どこか既視感を覚える彼にそっけない返答をされたオーフィスは首をかしげながら黙る。
溜め息を吐きながら着席すると隣の少女は慌てて立ち上がる。
「なんか、場違い感がすごいですけど… ニトリです。一応河童です、はい」
額に汗を浮かべながら自分が何故ここにいるのか理解出来ずあたふたしている。
せっせとすませ、すぐに椅子に座りガクガク震える。それを見た隣の妖怪は肩に手を乗せて落ち着かせようとする。
が、それは逆効果でだんだん顔が髪色の青よりも酷く真っ青になっていく。
「すまんな」
男の声の主は申し訳そうにあやまり立ち上がる。
「俺の名はエクエス。種族は訳あって言えない」
顔と全身を布で覆う男らしき妖怪は宣言する。
その布の隙間からは銀色の何かが見え隠れしている。先程ニトリの肩に手を当てた時に、ガチャガチャと音をしたことを考えると、鎧の可能性が高く日本妖怪ではない？と推理する。
「彼は私からその身を保証している。種族は私が知っているので疑わなくていい」
「ほんまかい？なんや怪しいな」
胸元が大胆にはだけているオーフィスより小さい幼女は聞き返す。
「納得してくれ。彼には軒並みならない事情がある」

「・・・ まぁええよ。いつか聞かせてもらうだけやさかい」
エクエスの着席とか共におはだけ幼女は立ち上がる。
「うちの名はないねん。他の子からは酒呑童子なんて呼ばれてます。種族はもちろん鬼やさかいよろしゅう」
額から生えている空へ湾曲している角を撫でながら語る。
日本三大悪妖怪と名高く、全鬼の頭をしている戦力でいえばトップクラスの妖怪である。
服などほぼ来ておらず羽織るだけで、大事な二箇所を黒い水着もどきで隠している。
笑みにはどこか妖艶さがあり、手に持っている大きな赤い椀からは酒の匂いが漂っている。
不気味な笑みを浮かべながら座り、最後の者の番になる。
着慣れない和服に悪戦苦闘しながら立ち上がる。
「我の名はアン・オーフィス。呼び方は好きでいい。無限の龍神それが我」
全八人の自己紹介が終わる頃にはそれぞれが別々の思いを心に浮かべていた。

現れる最強のＢＢＡ

「それでは会議を始めよう」
　この場の総指揮を取る朧花は堂々とした面持ちで告げる。これから、始まると言った所で酒呑童子は手を上げる。
　いきなり出鼻をくじかれた結果となり肩をガクッと落とすも、すぐに気を取り直し進行を再開する。
「それは、会議の前・・・ 今聞かねばならないことか？」
「そうやね」
「ならよし」
　発言の許可を得た酒呑童子はゆっくりと、小さく細い人差し指をオーフィスに向ける。
「そこのオーフィスはんがいる時点でこの会議、不可能ちゃいます？」
「ふむ。分かっているが、約一名その理由を理解出来ていないようなので一応説明を頼めるか」
　一人頭上に『？』を浮かべている戦闘バカこと巌は首をかしげている。
　彼だけがその理由が分かっておらず、他の者達に視線を合わせると総じて同意見と言った印象を受ける。
　この会議の本質上いくらバカで何も分からなくても分かるように解説せねばならないので、その理由を進行者たる彼は求めた。
「まず、オーフィスはんの実力はここにいる全員を合わせても届くものではないやろね。見れば大体実力は分かるはずなんやけど、オーフィスはんだけは無理や」
　幾多の戦闘を繰り返した鬼が分からないと呆れながら語る。
　前当主茨木童子。数多の陰陽師。それらの戦闘は全て勝利し、その経験から強さがわかる類まれなる眼を持っている。
　この場にいる中で最弱なのはダイダラボッチの森である。
　その弱さを例えるならば妖怪の中でも下級である小鬼にすら負けるであろうと言ったところ。

そこまで弱いのにこの会議に出席しているのは草木の神であった事が考慮されてのことだろうと考えている。

最強なのは言わずもがな八岐大蛇の厳だ。

かなりの実力者であり、身に纏うオーラ、抑えている闘気・覇気どれをとっても別格である。

他の五人もおおよそ実力を判別しており、自分の位置がだいたい分かっている。それほどまでに優れている眼なのだが、オーフィスに関しては何も分からないとお手上げ状態なのだ。

過去において一度もありえず、異常な現象だった。

怪訝な目でオーフィスを見つめる。

「この会議の根本は権力を八等分する事に意味があるんやろ？」

「たしかにその通りだ」

「ほならや、オーフィスはんがいる限り権力を分ける意味が無いんや」

「あぁなるほどな」

ここで、やっとおバカは正解に辿り着き両手を合わせて声を上げる。

権力を八等分したという事は何かを提案した際に、過半数より多い五人の賛成を貰わなければならない。

力の弱い河童はその技術力ゆえ発言でき、さらに弱いダイダラボッチはその由縁ゆえ発言できる。

弱者は戦力以外の方面からの力を持っているのだ。そんな中頭が一つも二つも飛び抜けているオーフィスの意見はもはや確定事項と言えてしまう。

従わなければ殺される。力の圧力。そんなのが起きれば全ての意味が無くなり、この会議自体崩壊してしまう。

そこを指摘した。配下の鬼の数も激減し始め、いい加減孤高を気取っている意味がなく藁にもすがる思いでこの会議に望んでいる。

返答によってはこの会議から降りるとは言わないが、殆ど同じような雰囲気を纏いながら進行者を見つめる。

「安心しろ。オーフィスはこの会議には参加しない。そうオーフィス

はな」
言葉を綴り終えた途端オーフィスの右横の空間に、一本の縦線が走る。
その線は次第にうねり始め真ん中の線から裂け、縦の楕円状に開く。開いた部分はひたすらな闇ばかりで、その上赤い瞳がこちらを見つめてくる。
唐突に発生した異常事態に、オーフィスと朧花以外の全員が警戒態勢を取り立ち上がる。
「安心していい。こやつが、本会議の最後の参加者だ」
片手を前に出しとりあえず座れと合図を出す。
進行者の彼が言うのだからそうなのだろうと、少し警戒しながらも静かに着席する。
そして、その裂け目から綺麗なブロンドの髪をなびかせながら一人の女がゆっくりと現れる。
全身を紫のドレスで覆い至る所にフリフリがついていて、かなり若い人用なのだが明らかに着ている人物は三十代前半と言ったところだ。
本来ならアンバラスなそれも、彼女の身に纏う妖艶な空気によってギリプラマイプラの方に傾いている。
出てきた女は床に足を付け、ドレスの裾を持ち少したくしあげ頭を下げる。
「どうも、初めまして。お母様（オーフィス）の娘のスキマ妖怪紫（ゆかり）と申します。以後お見知りおきを」
一連の動作全ては綺麗で美しく、年齢を感じさせないほど可憐だった。

スキマ妖怪。本来の種族ににそのような妖怪はそんざいしておらず、紫が最初で最後であろう。
オーフィスをお母様と呼ぶのは実にその通りだからである。
城の建築を手伝ったミニ龍は無機物にオーフィスの血を与え命を

さずけた。
意思疎通はできないものの、下級妖怪より圧倒的に強い妖怪を作ることに成功した。
無機物に命を宿せたのならば、予め命がある生命に血を与えればどうなるのだろうか？そう考えたオーフィスは、何のためらいなく自身の肝臓を一つ取り出し血液を垂らした。
肝臓一つぐらいなくても大丈夫だろ。
そんな安直な考えではあったが、結果は見事に成功し肝臓を基点に骨肉皮が作られ、龍型ではなく人型の妖怪だった。
肌は日本人に近い淡い肌色。指は細くすらっと伸び、瞳は髪のブロンドに近い色合いで何処と無くオーフィスに似ている。
例えるならば髪色の違う成長したオーフィスと言った印象だ。

「なんやて」
突如現れ不気味な笑みを浮かべている彼女の実力は、自分と同等または朧花以下だ。
「一つ聞きたいんやけど、そやつは数百年前に産まれたでええんやな？」
「いいや、一昨日だ」
「ありえへん……」
瞳は動揺のせいで揺れ動いている。
妖怪とは産まれてから年数が経てば経つほど力は増していく。種族によって最初の身体能力は異なるが、それでも産まれてすぐは圧倒的に弱い。
酒呑童子は産まれて三百年以上が経ちこの場にいる妖怪の中でも、かなり長く生きている。
鬼は元来より身体能力は高いので、酒呑童子ほど生きればそれこそ『天災』などと言われてもいい実力を身につける。
なのにも関わらず一昨日産まれたばかりの紫の実力は異常に高い。高すぎる。
「私も最初は驚いた。だが、ひとえにこれはオーフィスの特異性によ

るところだ」
「無限の龍神か」
「そうだとも」
オーフィスが妖怪を産み出しているのは、錬金術と呼ばれる方法に近く、何かしらの触媒を捧げる事で産み出せる。
龍とは触媒にとても適しており、その上神でもあるのでその適性は異常なほど高い。
無機物を元にするよりも、自身の肉を元に血を捧げた事で人型の妖怪『紫』が産まれた。
「ほんと異常やな」
「我普通」
全く酷いな人を異常扱いなんて。
けど、良かった紫が間に合って。城の建設で遅れるとは聞いてたけどギリギリだったな。
どうにか間に合ってよかったと心の中で安堵する。

いざいけ妖怪の京都へ!!

座っていたオーフィスが一度立ち上がり、空いた椅子に紫は腰を下ろすとその上にオーフィスが座る。
椅子に座るだけならば足が地面に付いていたのだが、間に自身の娘がいるとなると足は空に浮かぶ。
この光景だけを見るとどちらが母親か娘か分からなくなってしまう。
「せやけど、紫はんはの後にオーフィスはんがいるんやろ？ほなら意見は強制的に賛成やない？」
「その事なら大丈夫です。私は意見を一切出さないので」
「ほんとかい？」
「えぇ。朧花との繋がりを案じているならば、朧花の意見も封じます？」
「いや、ええよ。そこまで言うんなら信じるさかい… けどもしその言葉が嘘やったら覚悟しとき」
「分かっていますよ」
二人は同時に微笑み返す。鬼は八重歯が鈍く輝き、紫は口元を紫の扇子で隠しながら。
なんか、女の戦いみたいだな。怖っ、俺も巻き込まれないようにしなくちゃ。
話を纏まったのを確認するため一度朧花は見回し、問題がないようなのでやっと会議を始める。
「ゴホッ！これでようやく始まるのだが、この会議は妖怪の未来がかかっているものだ。
ここにいる中には部下や自分の種族の事を考えている者も多いと思う。なので、会議出席者には何かしら特別な物を与えようと思う」
「特別？なんだそれ、食えるのか？」
「残念ながら食せない。しかし、それ以上に重要であると考えている…… 名を与えようと考えている」

眠たそうに欠伸をしていた森は今の発言を聞き机に突っ伏す。
「眠ぃ」と呟きながら。
慌てて隣の森を揺すり起こそうとさとりは試みるも、残念ながら寝息を立てて本格的に睡眠に入ってしまった。
「ええんやない。ただ、普通の名前だと他にも名があるもんとかぶるから、数字なんか入れてみる？」
「では、私は一番低い八を貰いましょう」
「うげー・マジかよ狙ってたのに・・・ なら俺は七でいいや」
すぐさま、二人は数字を選択していく。
その後も続々と数字は選択されていき、後日発表されることになった八人の新たな名前が決まった。

スキマ妖怪八雲紫（やくもゆかり）
八岐大蛇七龍巌（しちりゅうがん）
鬼の総大将六辻童子（むつじどうじ）
覚妖怪五明地（こめいじ）さとり
謎の妖怪四（あずま）エクエス
河童妖怪三河（みかわ）ニトリ
ダイダラボッチ二葉森（ふたばしん）
総指揮一守朧花（いちもりろうか）
彼ら総勢八名が後に大妖怪と呼ばれる事になる者達だ。

「と、名は後で考えるとして次に本題に入ろう」
「そういえば何を話すんだ？俺は特にないけどよ」
「うむ、ひとまず現状を確認しよう」
両手を合わせると密閉され風一つ通っていないはずの部屋に、風が舞踊り始め机に上に集合していく。
風は机を小さく微かに何度も何度も削っていきここ一体を上空から見た地図を制作する。
精密な妖力のコントロールが要求されるかなりの高等技術に、鬼の

総大将はおもろいなとケラケラ笑う。
「今我々は五つの山を所有している。一つ目が我々がいる山、二つ目が古からの祠がある山、他の三つが逃げてきた妖怪達が住んでいる山。ここまではいいな」
地下で二ー活しているさとりと森はおいて、周りの五人は頷く。
それと童子と巌は古の祠を守るためにその山に住んでいる身なので、他の三つの山については詳しくは知らないがうっすらと知っている。
「最近陰陽師達の勢力が増し、多数の妖怪達がこの山へ避難してきている。そのおかげで山に住みきれない者達が出始めている」
「陰陽師達の勢いの原因は安倍晴明だろうな。昔その姿を見たことがあるがアレは人間と呼べる者ではない。人外の領域だ」
エクエスは昔を思い出し、苦虫を噛み潰したような苦痛の声色で伝える。
ここ京都に初めからいたのではなく東北の方から多数の妖怪と一緒にこの山へと向かっていた。
その途中で安倍晴明の一行と激突。結果は百もいた妖怪が自分を含めたったの三人になるまで祓われてしまったのだ。あの時の光景は目をつぶった今でも思い出す。
逃げようと背を向けてたり、命乞いをしたり。恐怖の象徴たる妖怪達が逆に恐怖し、なんの躊躇いなく祓っていく悪魔のような人間を。
実力は今でも勝てるか怪しい。それほどまでの化け物が人間側にいるのだ、それは勢いづくのは当たり前だ。
「そこでだ住居を拡張しようと思う」
「おいおいそりゃ無茶だろ。この近場にはこの三つの山しかねぇだろ？それともここから離れるのか？」
「いいや。それはできん。何しろ祠があるからこそ我ら妖怪がどうにかここを守護できているのだ。なのに捨てるなど出来るはずがない」
首を横に振りすぐさま否定する。
だろうなと机の背もたれに巌は全体重をかけ、頭を使うのは向かねぇよと天井を見上げる。

予めその反論は予定しており、そのカウンターとしてある方法を語る。
「一つだけ方法がある」
「ほうほうやて？なんやそれ」
「紫、お前の能力スキマのことを話せ」
「それでは話しましょうか。私の能力について」
待ってましたと言わんばかりに不敵な笑みを浮かべながら指を鳴らす。
紫の横に来た時と同じ亀裂が走り気味の悪い謎の空間を見せつける。
「私はスキマを操れるの。これは、お母様の次元の狭間と呼ばれる空間を操る能力の劣化ね」
「次元の狭間？なんですかそれ」
齢二十年のさとりは聞き慣れない言葉に疑問符を浮かべる。
「そうね。別次元と別次元を隔てる壁かしら。例えるならば人間界と天界や冥界の間にある、絶対に交わることのない壁ね」
「壁ですか」
「そうよ。だからお母様は自由自在に別次元へ出入りできるわ。私はその一歩手前、言わば裏世界へ立ち入れる能力と言えばわかる？」
紫が行き来できるのは人間界とその裏の人間界だけであり、能力で別の次元へと渡る事は出来ない。
と、聞くだけなら弱く聞こえるがこの能力は圧倒的に強い。
裏世界に逃げ込めば同じく次元に干渉できる攻撃しか受けず、一度スキマに入れば誰にも妨害されずに人間界の好きな所に行くことが出来る。
妖怪の中では次元に干渉できるのはオーフィスだけであり、他の人外や人間を含めても片手で数えられる程度しかいない。
そのような説明を受けた童子は何をしようとしているのか気づき口を三日月に歪める。
「そのスキマに妖怪を移住させるんやな」
「その通りだ。だが、スキマは到底住める場所ではない。なのでニト

リよ、お主の技術力が頼りになる」
「わ、私ですかァァァ!!」
「あぁ。河童の技術力を総動員して、紫の能力を活用しどうにか住める環境を整えて欲しい」
妖怪全土の命運が自分の肩に乗ったのに気づき、途端にプレッシャーに押しつぶされそうになる。
そんな大それたことを出来るはずがない。自分には荷が重いと拒否しようと、下ろしていた頭を上げると深々く頭を下げている大天狗がいる。
縦社会の象徴たりそのトップでもあるプライドの高いであろう大天狗が、自分のような下級妖怪に頭を下げている。その事実は胸を深々く抉る。
「……　時間はかかりますけどいいですか」
「構わない。終わりの見えない道より、終わりの見える道の方が圧倒的に楽だからな。時間がどれだけかかろうと、完成さえすればいいのだ。頼むぞニトリ」
「は、はい!!」
椅子を弾き飛ばして勢いよく立ち上がり、手を頭の横に当て敬礼をする。
緊張からか声は裏返りどんどんゆでダコのように赤く染まっていく。
「して、作戦名はどうする?そう言うのが必要なのだろう?」
「そうだな……　幻想の郷、幻想郷…　以後この事を幻想郷制作と名付けて行う。異論はあるか?」
満場一致でこの意見は議決され、妖怪の新たな住処の制作が始まっていく。

黒歴史は絶対に残してはいけない。

会議の日から数ヶ月経ち、季節は太陽の光がサンサンと降り注ぐ夏へと変わっていた。
気温は推定三十七度。あまりの猛暑に妖怪達の中でも夏バテするものが多い。冬に活躍する雪女などの冷気系統の妖怪の周りには、こぞって妖怪達が集まり冷気を味わっている。
その猛暑はもちろんオーフィスにもダメージを与えていて
「暑い」
小さく呟いた声は洞窟のような今いる空間に反響し遠くにいた白髪の少年の耳に届く。
「全くだ。最近の夏は余計酷くなった」
「異常」
「だな」
汗ばんだ前髪を掻きあげ綺麗で鮮やかな緋色の瞳は季節を恨むように地球を睨む。
羽織っている白い服以外はほぼ何も着ておらず、黒色の下着がもろ見えているのだがオーフィスの精神は男なので特に気にしない。
しかし、この空間の支配者は別でありそちらの幼女は顔を真っ赤にして声を荒らげる。
「ズボンを履いてください！うぅぅ、恥ずかしくないんですか!!」
「いや全く」
「オーフィス様やこいしに悪影響が出るのでしっかりと着てください!!」
「だったら後ろのやつどうにかしろよ」
背後を指さし指摘され振り向くと、産まれたままのあられもない姿を見せている人形のような幼女がいる。
こんな暑いのにゴスロリ服なんか着てられるかよ。流石に死ぬわ。
ゴスロリ服という事もあってカラーリングがほぼ黒。黒は太陽の

光を吸い余計に暑くするので着たくないのが心情だ。
　それでも外を裸で歩くほどモラルがない訳ではなく、さとり達の住む地霊殿の中では脱いでいるだけである。
　心を読んでしまう彼女の能力は他の妖怪から忌み嫌われ、地上から追放されて地底のさらに奥底旧都に住み、その中でもひときわ大きい西洋の城『地霊殿』にさとりは姉妹とペット達と仲良く暮らしている。
　ちなみに、ニトリと協力開発したコンタクトレンズによって覚能力は封印してある。それでもニート体質は抜けなかったみたいだ。
「裸族しかいないのですか！」
「なら服プリーズ。薄いのがいい」
「分かりました少し待っていてください」
　駆け足気味に部屋を飛び出し自室へと服を取りに行く。
「なんだかんや言いながらあいつ俺らの面倒見てるよな」
「さとり良い奴。もちろん森も」
「そうかい」
　二人の間にはあまり会話は無い。と言うより、ダイダラボッチの方が避けている節がある。
「我のこと嫌い？」
「いや別に…　何でそんなことを」
「我友少ない。だから数少ない友を大切にしたい」
「友？俺がか？」
「もちろん」
　出来うる限りの笑みを浮かべる。実際は頬がかすかに上ずり、不気味な笑みを浮かべている。
　思ってもしない言葉に照れ顔を俯かせる。
　軽いギャルゲーの主人公ばりの手口に驚くも、これを天然でやっているのだからオーフィスは恐ろしい。
　数秒で心を落ち着かせ、頭を横に振ってから持っていた日記を差し出す。
「ならお礼だ。これでも読みな、なかなか面白いぞ」
「ありがとう」

「それと声に出して読んだ方がいいな」
「分かった」
渡されたのはピンク一色の手日記。
表紙には丸っこい字で日記と書かれている。名前は見つからず誰の物かまでは分からない。
とりあえず一ページ目を読むか。する事ないし
正体不明の表紙を開くと、中には表紙と同じ字で書かれていた数行の詩がある。世間一般で言うところのポエム?らしきものだ。
「こいしはどうしていも」
「イヤァァァァァァァァア!!」
まだ冒頭の数文字しか読んでいないのだが、絶叫上げながら涙目でさとりが突撃してくる。
ドアは急に開かれドン!と大きな音を立て、地霊殿中に響き渡る。
「な、な、なんでそれを持ってるんですかぁ!」
「森に読めば?ってもらった」
「いつの間に!」
「こういうのは読まないと意味無いだろ?だから渡した。しかし、いい詩だったぞ。まさか妹にそんな」
「ヤメテエエエエエエエエエエエアエ!!」
著作さとりの日記は妹への思いをなぶり書きしたものであり、あまりの出来栄えに最初は毎晩寝る前に読んでいたのだが、ある程度成長した今では黒歴史となり完璧に封印したはずだった。
自室の机の引き出しの二段底にあるメモに書かれた暗号を解き、地霊殿でも立ち入り禁止とされる部屋に置かれた金庫を手に入れたパスワードで開け、そこから部屋に戻り本棚の赤い本を傾け隠し部屋に入り、金庫にあった魔術を起動させ取り出せる、何重にも予防線を重ね掛けし誰にも見られないようにしたもののはずなのだ。
だったのだが森は暇つぶしですべてを解除。そして、手に入れた日記(笑)を愛読していた。
とんでも事件に本日二度目の絶叫は確実に地霊殿中に響き渡り、遠くにいた妹こいしを引き寄せ慌てて弁明する事になる。

どうにか言いくるめことなきを得て安心したのだが、残念な事にその後さらに精神を痛めつける攻撃を受ける。
渡した服のサイズが胸の部分だけ狭く裂けてしまい、それを見て自身の胸を抑え「胸なんて飾り。将来的には垂れるからいらない・・・そう悔しくなんかない。胸はいらない」呪詛のように呟いたりしていた。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

妖怪達には楽しく安心した日々が訪れていたが、唐突にそれを終わらせるべく死神が訪れようとしていた。
「きたでおじゃるな！」
「はい。ここに参りました」
ドンと居座り、紺色の和服をはおり手には笏があり、両膝を突いて跪く青年に言葉を投げかける。
その声はどこか震えていて恐怖していた。
本来天皇に謁見できる者は少なく、十五そこらの青年ではまず無理なのだが、彼は特別で今回のみ謁見を許されている。
「妖怪共は力をつけたでおじゃる、はやくはやく殺せ！」
「しかし、我らも」
「反抗する気か？私の命令は絶対ぞよ！」
「了解しました」
青年の着ている戦闘に邪魔だとかなり改造した正装は、袖がなく足も膝までしか裾が届いていない。
この時代ではまずありえない格好だが、彼は型に囚われる人間ではない。
隣で跪いていた銀髪の少女の肩を叩いて立ち上がり、部屋を後にする。
後ろで天皇が何か言っていたようだったが、いちいち聞いていられないと急ぎ足で離れる。
「よかったのですか？」

かなり離れ近くに人影がなくなったところで言葉をかける。
少女の見た目は髪通り日本人離れしていて、髪の銀と違う金の瞳を麗せ、見上げるように顔を覗いてくる。
ピンと張った眉毛など、容姿端麗の言葉が似合う彼女に覗かれた男はどう考えても思考が停止してまうのだろうが、覗かれている張本人は何食わぬ顔で言葉を返す。
「数ヶ月前のアレを知っているだろ?どう考えても、蘆屋道満戦で疲弊した今じゃまともに戦えそうにないからね。いますぐ準備を始めなければ。なのに、いちいち小言を聞いてる場合じゃないよ」
数ヶ月前のとは、オーフィスが奇跡的に使えた魔力で山を殴った時である。力加減をしていなかったせいで、京都より遠く離れ蘆屋道満討伐作戦をしていた彼の元に余波が届き、やっとこさ討伐したと思いきや戻ってこいと言われ京都へ急ぎ帰還した。
少女もですねと呟き、大量の呪符の用意をしなければと一人先に家へ戻っていく。
後ろ姿を見守り今度は転ばなかったと安心した所で木の手すりに腰を下ろし、日が登っているのに見えている月を見上げる。
「さて、アレを引き起こしたのはどんな化け物なのかな?勝てるといいけど・・・」
青年は不安げに呟き、泣き言はここまでだと両頬を叩いて自分も自宅へと戻る。
彼の名は安倍晴明。この時代、後の時代でも、無限と唯一対等に戦えた人類であり人類の最高到達点とも呼べる存在。
妖怪の天敵陰陽師を指揮する最近の人間が未だ姿かたちもわからないオーフィスを標的に見据えていた。

あたりまえ、あたりまえ・・・　あたりまえ妖怪

コツコツ。
草履ではなく、革靴の底が地面を削る小さな音が小刻みに間隔的になる。
この時代草履以外を履くものはありえないのだが彼は違う。高速戦闘には草履は不便だと他国から流れてきたそれを履いている。
そのため、服も改造し男ながらもかなり肌色が多く見えている。
キキッ。きしんだ木の扉が奇っ怪な音を立てながら開く。自分が通れるほど開け通ると、勝手に閉まる半自動ドアとなっていた。
部屋の中には小さな灯火が微かに照らし、一人本と睨めっこしている少女の髪を赤く照らしている。
「ごめん。遅くなった」
「別にいいですよ、清明」
本に集中していたいのか簡素な返事をする。
それも仕方が無いかと苦笑いを浮かべながら近くの木の椅子に腰を下ろす。
「で、準備は終わった？」
「いえまだです。敵のあの異常さを踏まえとある武具の貸し出しを要求しました。三日後には貸し出されると推測しています」
本に栞を挟んで閉じ、灯りで赤く染まった髪を揺らして青年の方に身体を向ける。
そこで気づいたのは和服ではなく、白いボタン掛けの服を着ていた事だった。
日本人離れした長く伸びた手を全て覆う白い布地。下は布地の折り返しだけがあり、下着以外何も履いていない様子だ。
その上髪は少し水が滴っていて、風呂上がりなのが伺える。一度意識してみれば麗しい花の匂いに気づく。
「その服前持ってたのだっけ？」
「いいえ。先程京一を自称する店で買ってきました。何処と無く故郷を思い出すのでつい」

「いいんじゃない。結構似合ってるよ」
「そうですか」
青年は自分では気づいていないがかなりのイケメンの部類に入っていて、優しい笑顔は数多の女性を落としてきた。
だが、すぐに皆後悔していく。惚れるのが遅かったのだと。
「妻がいるのにいいのですか、同僚をナンパして」
「いやーそれ言われると厳しいな。はははは」
そう彼は既に既婚者であり、妻と子供がいるのだ。彼の一番は既に決まっていて、もう一番にはなれない。
ならばと二番目三番目を目指すのだが、政府より彼の異端性を踏まえ一妻だけだと宣言したので不可能だった。
「けどまぁ彼女とは愛がないからね。浮気と呼べるのかな？それに好きな人は他にいるしね」
苦笑いを続けながら現状を語る。
安倍晴明。人間始まって以来の異常性を内包した異端児。
その力を一代だけで終わらせるべからずと、どうにか強い子孫を残そうと政府は巫女の適性が高い少女を強引にあてがわせ、子供を作らせた。
政府に頭を下げて暮らしている彼には拒否権などなく、愛もない子供を作りその後かれこれ五年以上会っていない。
妻の顔や子供の顔をすら忘れかけている。それだけどうでもいい事でもある。
「では、私を拾ったのは下心は無かったと」
「当たり前だよ。目の前で困っている人がいれば助けるのが僕だよシエル」
シエル。それが日本人ではない彼女の名である。
生まれは西欧の方であり両親と兄がいた。それは仲睦まじく暮らしていたのだが、平和とは唐突に一瞬で崩壊する。
一体の恐怖の象徴。首なしの鎧騎士にして死神【デュラハン】が両親と兄の命を奪っていた。
目の前で自分を庇うように覆いかぶさる二人の両親。どうにか標

的をずらそうと威嚇しながら遠くへ走っていく兄。家族が命をかけて護りどうにかその場は生還できた。
だが、その当時は眠るだけで死んでいく家族の映像を見続け、【デュラハン】を殺すためにと退魔の力を身につけ復讐を誓う。
結果三年越しに復讐を果たしやっと終わった。そう思った矢先戦闘の疲れから海へ墜落。
波に流されたどり着いたのが日本であり、そこで拾われたのが晴明だった。
そんな過去のことを思い出し頬が赤くなるのが分かると顔を俯かせる。
「ですね貴方はそんな人だ……　だから私は貴方の事が」
「ん、何か言った？」
「いえ何も。それより早く寝なければ」
夜更かしは美容に大敵。そんな事を思いながら、どこか残念そうに清明の部屋から出て自分の寝室へと向かう。
彼女の背中を見送った清明は、机に置かれている本を棚に片付け灯火の日を消す。
辺りは一瞬で暗闇になり、何処に何があるかなど見ることは叶わない。
はぁ、僕はいつになったらこの思いを伝えられるのかな……　僕の意気地無し。
胸に秘めたこの思いを彼女に伝えられるのはいつになるのだろうかと、考えながら寝床へ入っていく。
そして、深い深い眠りへとつく。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

三日が経過し、いつものように彼ら妖怪は起床する。
この日が妖怪達全土の命運をかけた節目になるとは知らずに。
「よう、オーフィス！珍しいなこんな暑い中外にいるなんてよ」
「さとりに追い出された」

「かっかかか！あの温厚なさとりを怒らすなんて流石だぜ！」
豪快な笑い声を木々に響かせて巌はオーフィスの肩を何回も叩く。
「しっかし本当に暑いな」
ヌルッと現れ、言葉に反し全身を布で包み姿を隠しているエクエスは声をかける。
どこがだよとエクエスの肩を軽く小突き、また豪快な笑い声を上げてから机の上にあるお茶をすする。
彼に続き二人もキンキンに冷えたお茶を飲む。
キンキンに冷えてやがる・・・ あ、ありがてぇ・・・ ありがてぇ。
日本に生まれてよかったと感謝しながら出された朝食を食べる。
見た目はグロいが美味いヤツメウナギの丼を巌が食べ、二人はヤツメウナギのひつまぶしを食べる。
朝からかなりガッツリいくなと思うが、この後の予定の事を考えたら仕方がないと思う。
ここ最近、妖怪達の中だ力をつけたいと言うものが増え、そのため強いやつが鍛えなければいけない事になり、エクエスや巌が駆り出されている。
「ふぅ・・・ 食った食った」
二人がひつまぶしを食べ終わる前に、二皿目も平らげた巌は膨れ上がった腹をポンポンと叩く。
「早い」
「いいんだよ。これでも味わってるからな・・・ あっ、それとオーフィスまた今度も再戦しろよな」
「えーめんどい」
「なんでそこだけ感情でんだよ」
会議が発足してから数日後。巌はオーフィスの力を確かめると決闘を挑んだ。
結果は見事ぼろ負け。同じ龍であってもやはり実力が違うと改めて思い知らされ、一から特訓を始めている。
「あまり他の妖怪に迷惑をかけるなよ」
「へいへい分かってますよ。たく、相変わらず頭が硬ぇんだからな」

「聞こえているぞ巌」
「聞こえるように言ってんだよ」
二人は顔を向かい合わせメンチを切る。
正直二人の仲はあまり宜しくない。自分が楽しければいい自由派の巌と、自分を助けてくれた妖怪達に恩を返す頑固派のエクエス。
まさに水と油で顔を合わせるたびに一触即発だ。
またやってるよ二人とも・・・ もっと仲良く出来ないもんかな。
もう何度も見た光景に周りの妖怪達も素知らぬ顔で過ごしている。逆にこれがあるから平和なのだと思ってすらいる。
至って平穏だった日常は突然駆けてきた一人の妖怪の言葉によって崩壊する。
「陰陽師が、陰陽師が攻めてきたぞ!!」
小鬼の叫び声はさらなる叫び声を巻き起こす。

安倍晴明の憂鬱

駆け込んできた狐型の妖怪【鎌鼬】のコン。自慢は種族の特性でもある肌を切りつけるほど高速で風を放つことであり、それは自身がかける時にも適用されかなりの速度を出す。

そのため、山の防衛隊の後方に位置し非常時に連絡係として山の麓へかける仕事をしている。

陰陽師が現れた際は逐一報告するようにしていて、今回もそのたぐいだろうと軽く聞いている。

「また来たのか。前回は五日前だったか・・・ まぁ椛が」

「ダメなんです！椛さんがやられそうなんです!!」

「はぁ？あの椛がか？」

実力としては大妖怪に届かないも、遊び感覚で戦った時はそこそこ本気を出した相手だ。

そう易々とやられる椛ではないはずなのだ。

何かの冗談だろと笑いまじりに聞き返すが、次に語られた言葉に冗談ではないのだと思い知らされる。

「清明とほかの陰陽師達が」

「安倍晴明・・・」

「まじかよ」

唖然しながら零れた言葉にはどこか絶望があった。

妖怪達の天敵の最強の陰陽師が攻めてきた。それを知ったら周りにいる下級の妖怪達はざわめき始める。

ざわめきは次第に恐怖心を増し、死にたくないと泣き叫ぶ者がちらほら現れ始めどんどん拡大していく。

まずい。と悟った巌は立ち上がると。

「しかったねぇな・・・ いっちょ殺してくるか。妖怪の強さを知らしめねぇとな」

「そうだな、いつまでも人間に舐められてなどいれない」

「我も行く」

その言葉は弱き者達の心を落ち着かせる。三人が三人妖怪達の中

腕を上空に上げ絶望ではなく、希望の雄叫びを妖怪達は上げる。
『うぉぉぉぉぉぉおおおおお!!』
でも最強格ばかり。負ける通りが無い。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

木々が生い茂り森と呼ばれていた場所は妖怪と陰陽師の戦いにより壊滅していた。
無差別に放たれた陰陽術は木々をなぎ倒し更地へと変えている。
他に八人いた防衛隊は数の力に押し負け二人が払われ、六人が瀕死の重傷で地に倒れ伏している。
防衛隊隊長の『犬走椛』ですら怪我を負っている。
服は至る所が裂け肌が大胆に露出していて、白い肌には無数の鮮血が彩っている。
地に伏した仲間を一見し、空から落ちてくる橙色の【呪符】を紙一重でかわしていく。
「くっ」
「妖怪め!死ねぇぇぇぇ!!」
一人の陰陽師が一枚の薄い紙【呪符】を取り出し、霊力を込めると黄金色を放つ。それを投擲し雷の線が妖怪を払うため轟く。
二十人にも及ぶ陰陽師の強襲に盾は壊され攻撃を防ぐ方法がない。それでもここで負ければ援軍が来る余地すらなくなってしまう。
野生の勘。第六感。頭で考えるより早く体が動く。
電撃を刀で受けた直後に一瞬で地面に突き刺し地面へと逃がす。
流石に全ては受け流せず手が微かに痺れている。
—強いな彼女は。今まで戦ってきた妖怪とは圧倒的に違うな、僕がやるか。
彼女の今の動きには確実に【武】があり、他の人間が使ってたから、切れるからなどのどうしようもない理由ではなく、極めたいからこそ使いたい。と確固たる理由を感じる。
何かしらの信念がある者は人間でも強く、そこに妖怪だから違うなどという事は無い。

「皆下がって後は僕がやるよ」
優男の笑みを浮かべながら一歩前へ出る。
「ですが」
「今の君たちじゃあ彼女はいくらやっても倒せない。こんな所で時間を使って、逃げられれば正しく愚の骨頂だ。だからね僕がやるよ」
二十人の陰陽師達は年齢層はバラバラで五十代～二十代だ。その誰もが年下の彼に発言に言葉を返すことが出来ず、押し黙ることしか出来ない。
悔しいがその通りだと、前を清明に譲り後ろへ後退する。
―さてどうしようかな、彼女強いしな。
いざ対面してみると余計にその強さを実感する。
刀を杖替わりに地面に刺し、震える足ながらも気合いで立っている。押せば倒れるほど弱っているにも関わらず、鋭い眼光は衰えるどころかより増している。
「君が人間だったら良かったんだけどね。僕達の平穏を揺るがす君たちを野放しにはできないんだ、ごめんね」
「勝ったつもりですか？ずいぶんと余裕ですね」
「そう見えちゃう？僕としては君は警戒に値する妖怪だと思ってるよ、だからこそここで殺らないと将来が心配なんだ」
一枚の【呪符】を取り出し右の人差し指と中指で挟んで前へ突き出す。左手は人差し指と中指以外を全て折り口の前へ添える。
「邪符を焼き払え。急急如律令」
優しく唱えられ放られた【呪符】は小さな淡い火を灯す。
長い長方形の【呪符】の先端からジリジリ燃え広がっていき、全てが燃え尽きた瞬間爆発的に発生した業火は急激に膨張する。
陰陽師の使う陰陽術の初歩中の初歩【火行符】
他包囲拡散型呪術であり、中級以上の妖怪はとてもではないがダメージが入らないほど弱い。
なのだが、清明の放ったそれは普通とは大きくかけ離れた威力を出している。
地面の草木を焦がし、木々を木炭へと還る。その業火の狙いはただ

一人犬走椛。上級妖怪と遜色ない彼女は目前へと迫る業火に、死を覚悟した。
僅かな霊力で放たれたそれは、すでに上級妖怪すら祓う威力。何も対処できずに業火へ飲み込まれ
「火は厳禁だな!!」
突如空より水の激流が下り火を一瞬で消化する。
ドン。
火を消した影響で当たりには水蒸気となった白い煙が一時的に充満し、そこへ空から塊が落下し盛大な音を立てて着地する。
水蒸気で湿った青の髪をかき揚げながら厳は吠える。
「おいおい森ん中は火気厳禁って教わってねぇのかよ」
「あはははは。すみません、彼女が逃げる可能性もあったので範囲攻撃をしました。それに、出来た木炭は後で使いますので特に問題はないかと」
「かかかっ… 随分と面白い事を言ってくれんな… てめぇに後はねぇぞ」
獲物を定めた視線を清明へ向ける。大妖怪の殺気は後に控えている陰陽師達は腰を抜かしているのに対し、清明は平然として笑みが消えていない。
――彼の力ならあの莫大な力を放ってもおかしくないな。隠しきれていない妖力からしてもね。
けど、あの程度なら勝てる。これならわざわざ武器を貸し出してもらわなくても良かったかな。
背負っている麻布で包まれ【呪符】の三重封印を施された剣に意識を移す。これの取り寄せで突撃まで時間がかかってしまい今日になった日本の重要な剣である。
「それは中々の業物だな…」
言葉を放つだけでとてつもない圧力を放っている、全身を布で包んだ謎の男が後ろの木々の合間を縫って現れる。
引きずるように刀身が二m程ある両刃の剣を運んでいる。雑なような取り扱い方をしているが、その刀身に一切の刃こぼれは無く銀色

の輝きを放っている。
「お二人共誠に申し訳ありません。私の力不足のせいで」
「気にすんなや。それに、アイツは安倍晴明らしいからな・・・ 一介の妖怪にはちと厳しいだろうよ」
「だろうな。奴を前にするだけで冷や汗が出てくる」
二人は椛の方に視線を移し語りかけているが、清明の方への集中は解いておらず挙動の一つ一つを知覚している。
目測だが二人とも同じ程度の強さだと考え懐から五枚の【呪符】を取り出し戦闘態勢へ移行する。
「で、オーフィスはどうした」
「安心しろ・・・・・ 今ついた」
空間が裂ける。
縦に亀裂が入り真ん中から目のような楕円形に分かれる。
裂けた空間にはひたすらな虚無があり、深淵を除いてるような錯覚に陥る。
そのせいで後にいる陰陽師達は肩を震わせ膝から崩れ落ちている。
―やばいな。アレは本格的にやばい。妖怪？いやそんな類ですらない・・・ 神話の生物に近いな
確信している。今まで感じたことのない蘆屋道満とはまた違う嫌悪感。心臓を直接撫でるような気色悪さ。

深呼吸をして心を落ち着かせる。そうしなければとてもではないが立ってすらいられない。
「新手の援軍かな？」
「そうだぜ。妖怪史上最強のな」
その言葉が本当なのであれば三ヶ月ほど前に発生したアレは、目の前の妖怪の物ではなく援軍の起こした可能性が発生する。
自然と左手の握りこぶしに力が上がる。
「ここ？・・・ 祭りの会場・・・」
空間から肌色の手が伸び裂け目を掴んで姿を現す。
人形のように整った不気味な顔。黒く腰まで伸びた黒の髪は風で

なびく。
背丈は明らかに六歳や七歳のそれでまんま子供。しかし、放たれるオーラは別格。いままで陽気だっあ視線は敵を射抜くような冷徹な視線へと変わる。
油断ができない。そう悟ったのだ。
「初めまして僕の名前は安倍晴明。皆からはよくあべっちなんて呼ばれてるよ・・・ 君は？」
「アン・オーフィス。無限の龍神」
笑みは引き攣り前へ出していた【呪符】を懐にしまい直す。
「全員その場で待機!!少しでも動くなァ！」
他の陰陽師達が始めて聞いた清明の怒鳴り声。
いつも陽気な彼が本気なのだとそのプレッシャーがビシバシ肌から感じる。
そうして、二人の怪物は顔を合わせる。この時から転生者としての歯車が動き始める。

少女の復讐は止むことは無い。

両者の間の空気は凍りついている。
殺気と殺気のぶつかり合い。それが、二人の怪物で起こされた物だと理解している者達は互いに相手を規格外だと理解する。
そんな中片膝をついて傷口を抑えている椛が申し訳なさそうに見上げる。
「オーフィス様に巌様にエクエス様・・・　私は」
「いい。早く戻って治療」
「はい・・・　ご武運を」
舞い上がる落ち葉の旋風に包まれ一瞬で姿を掻き消し、風は山の頂上へ向かう。
その光景をただ黙って見ていた清明に周りの陰陽師達は何故？と視線を注ぐ。それも仕方がない。シエルを除いた陰陽師達は実力差に気づけてすらいないのだから。
―どうする・・・　どうする・・・　アレに勝てない。勝てるはずがない。いっその事逃げ
撤退をしようかと考えついた直後、顔の横を何かが飛ぶ。耳元には金属の擦れる音が通り続ける。
「なぜ貴様が生きている!!エクエスゥゥゥゥ!!」
それは狂気に復讐鬼に染まったシエルの一撃だった。
振るう剣は関節部のような物が見え、そこを起点に生き物のようにうねり通常ではありえない軌道で命を狙う。武器の名を【蛇腹剣】とし、シエルの昔から使用している剣だ。
狙いはオーフィスでも巌でも無く、布をかぶっている謎の妖怪だ。
突如としてうねりを上げる【蛇腹剣】に反応が遅れ、後に飛び退くが剣が布を引き裂く。
「しまっ」
「ウァァオオオオオオオ!!」
追撃。二撃目の【蛇腹剣】が唸る。

布を引き裂かれ動揺し、その鈍い銀色に輝く鎧に火花を散らす。
鎧に傷をつけ続けている【蛇腹剣】を横から殴りつけ離すと、忌々しげにシエルを睨む。
だが、そこに目はない。いや、頭が本来あるべき所にない。
脇に抱えられた兜。兜の隙間から赤い二つの鋭い眼光が睨みつけている。
首があるべき所にあるのはひたすらな黒。鎧は一部銀色もあるが大体の部分が薄汚れ鈍く輝いている。
【デュラハン】それがエクエスの正体である。
首なし騎士。死を告げ執行する死神のような存在。
宣告から逃れるには【デュラハン】の馬が水の上を走れないので水に逃げるか、撃退するかの二つしかない。
エクエスは馬に跨っておらず、死の宣告から逃れるには撃退する他にない。
鎧の傷口をいたわるように撫でる。
「なぜ貴様が生きているだっか小娘・・・ それは私も同じだ。本当に貴様はしぶといな」
「あがぁぁぁぁ、あああ、!!」
「理性すら飛んだか」
シエルはそれこそ獣のように無差別に剣を走らせる。言語はすでに消滅。あるのは殺意のみ。
憎悪に染まった雄叫びを上げながらエクエスに切りかかる。
地を這うように進み、突如として上へはね上げ心臓一点を狙う。
「甘いぞ。貴様の剣戟を忘れた事などない！」
頭を上空へ投げ捨て剣を両手持ちにして、頭上高く剣をあげ叩き下ろす。
真正面から衝突する寸前、シエルは腕を思いっきり引き【蛇腹剣】の関節部を連結させ無くす。
一本の硬い剣へとモードを変え刃渡り一ｍほどの剣を使い今度は近接戦を行う。
剣先を向けシエルの顔の横から高速で突きを繰り出す。霊力の込

められたそれは、一突きで大木を大破することが出来る。
「その攻撃も見飽きた。一体いつの再現をするきだ？小娘！」
振り下ろし地面に突き刺さっている剣を離す。剣は重力に従い地面へ横たわり、その重さから多少の砂埃をあげる。
「憤ッッ！」
左手の平に妖力を集中させる。
圧縮に圧縮を重ね、第二第三の鎧を着込んだ以上の防御力を得る。高い防御力は言い換えれば高い攻撃力でもある。
突き出される剣先に左の手の平をお返しと言わんばかりに突き出す。
矛と盾。その勝敗は矛の敗北だった。
防御力に阻まれ衝撃をモロに受けてしまい後方へ吹き飛ばされる。一回転二回転……　地面を何回も転がりながら清明の元まで戻る。
「シエル、ダメだ今は逃げ」
「アイツは両親の敵だ！止めるなんて出来ないィィィィ!!」
いくら静止を呼びかけても止まらない。その理由は昔に聞いていた。
両親を殺し兄を殺し日常を殺した天災の【デュラハン】ことエクエス。最後に崖まで追い込みその心臓を穿ったと。そう聞き復讐の連鎖から解き放たれていたと思っていたが違った。
今一度平然とした表情でいるエクエスに理性が吹き飛び、狂戦士のような理性の理の字もない滅茶苦茶な戦闘を繰り返している。
【デュラハン】に切りかかるシエルの後ろ姿を見た陰陽師達は口々に叫ぶ。
「私達も援護だ!!」
「ばっ」
―ダメだ。もう彼らは言うことを聞かない…　戦闘を避けられない!!
まずい。まずい。まずい。今戦えば確実にあの化け物に滅ぼされてしまう。その未来しか見えない。
他の陰陽師達は【呪符】を使い攻撃を始めている。

「やっと俺の出番か！いいぜ、ぶち殺してやるよォォ!!」
確かに彼ら(陰陽師達)は強者ではあるが敵の男はさらにその上をいっている。
二十人合わせどうにか清明の足元に届いているレベル。それでも現在だとトップクラス。
その彼らの霊力の込められた多彩な攻撃は巌の皮膚に傷をつける事は出来ない。逆にカウンターを受けピンチになっている。
「だーくそ！こそこそと、もっと大技でこいや!!」
すぐに彼らが負け戦況がひっくり返ってもおかしくないが、コンビネーションを駆使し攻撃を回避している。
圧倒的な攻撃力も当たらなければどうということはない。
二十人の陰陽師が巌を抑え、狂戦士シエルがエクエスを抑える。今はこの均衡が築かれている。
だが、一度目の前の化け物(オーフィス)が参戦するばいとも容易く崩壊する。
やるしかない。そう判断し【呪符】を二十枚取り出す。
「我が身は加速する。急急如律令」
左右に十枚ずつ分け、しゃがんで両足に添える。
すると、溶けるように【呪符】が消えていき、すべて消えると足全体に細い緑色の線が走る。
革靴が地面を蹴り抜く。
地面にはクレーターが生まれ、その速度を知覚できた物はオーフィスの他にいない。
「付き合ってもらうよ」
「分かった」
防御の構えはせず手を垂直にぶら下げる。
すまし顔の幼女に清明は体当りして一緒に一つ隣の山まで飛んでいく。

無限対人間

隣の山。この世界にオーフィスとして誕生した時に居た山である。
オンボノヤスが守護者として守っていて、あの時の傷から復活し今でも守護者として活躍をしている。
が、現状この山に妖怪は一人としていない。理由としては、綺麗に着地を決めた二人を囲んでいる犬型の魔獣達である。
緑色の草木に赤い鮮血が所々微かに付いていて、銀色の魔獣達の牙には肉の欠片や赤い血が残っている。
―十体・・・ いや百体近くいるのか
清明が魔獣の数を察知している中、邪魔だと判断したオーフィスの動きは迅速だった。
手の平に魔力を集中させ、地面へぶつける。オンボノヤスを倒した時と同じ戦法だが、今は明らかに違う点がある。
それは魔力を制御して放っている点だ。
「百体近く居たと思ったんだけどな・・・・・ まさか一撃なんて」
知性の欠片もない、本能だけで殺してきた魔獣には『回避』の二文字はなく、口から尻尾にかけて水平に真っ二つになり、肉が地面へ落ちる気色の悪い音が森を包む。
「このぐらい余裕」
「ははっ勝てる気がしないな」
笑っているが、そこに先程までの余裕さは無く自分を鼓舞するための笑だった。
ゆっくりと右手を背中へ伸ばし布で包まれている剣を持ち上げ前へ移動させ、両手持ちにして体の正面に構える。
構えに武術的な何かは無い。明らかに使い慣れていない様子だ。
「だとしても、負けると分かっていても、やらなければいけない事があるんだ！封を開けろ、急急如律令ッッ!!」
剣を覆っていた布が弾け飛ぶ。そこから現れた剣は不気味だった。
塚は黄金を放ち、刀身は波打つようにうねっている。しかし、そこ

に刃は付いていないのか鈍い銀色が輝く。
のだが、オーフィスは直感的に避けなければいけない。そう思い、後ろへ飛び回避をするも僅かに間に合わない。
宙を漂う左手がまるで豆腐を切るように呆気なくいとも容易く両断される。奇跡的に骨には掠っただけだが、肉は断たたれ切断面から血が溢れる。
「外した・・・ 今のを避けるのか」
「なにそれ、なぜ我の腕を切れる?」
初めて椛と戦った時は魔力操作など一切出来ず、元の軟弱な生身で戦闘をしてかすり傷を負っていた。軟弱とは言うが、並の生き物より圧倒的な防御力を誇る。
その時に比べ今は魔力操作が行えるので防御力は飛躍的に上がっている。例え惑星級の隕石が落ちてきたとしても生きているレベルにはある。
それを、刃もない異様な剣は容易く断つ。
「君は知らないようだねこれについて」
千載一遇のチャンスを逃した清明は距離を離して声をかける。それは既に倒すチャンスを失い、時間稼ぎに徹しているに過ぎない。
「知らないなにそれ」
「日本の三種の神器の一つ【天叢雲剣】だね。詳しい説明は省くけど、これには龍殺しと龍の破壊力の本来相反する力が宿っているんだ。
確か、中国ではこれを矛盾って言うんだっけかな。博識には疎いからよく分からないや」
後ろ髪を掻きむしりながら剣の秘密を語っていく。
天叢雲剣とは日本神話における最高峰の剣である。高天原より追放された須佐之男が八岐大蛇を退治し、その際に尻尾より剣が現れた。
後に剣はアマテラスの元へ献上され【天叢雲剣】とされ、天皇の元へ伝わっている。
八岐大蛇の力を蓄えられ龍の破壊力を内包しつつ、八岐大蛇の死を体験し龍殺しを得た。矛盾を内包するそれは、龍に対する絶対的な有

利性を誇る。
事実、オーフィスの肉体を切断できた。これだけでも上々だろう。
もし、清明が剣術を使えた場合最強の龍殺（ドラゴン・スレイヤー）しの称号を得ていた可能性すらある。剣のノウハウのない清明でこれなのだから。
「三種の神器・・・ 八尺瓊勾玉とあとなんだっけ？」
「以外と知ってるみたいだね。なら隠すのも無粋か・・ 今は八尺瓊勾玉は持ってないけど、もう一つ八咫鏡ならここにあるよ」
そう言い、左手に盾のように身体を映す鏡部分を上にして付ける。肌に押し付けられている方の模様はほとんど何もなく、中心地点に太陽のような模様がある限りである。
「どんな能力？」
「うーん語ってもいいけど、見てもらった方が早いと思うな。何かしら魔力攻撃を放ってみてよ」
「分かった」
手に平に蹴鞠玉程度の大きさに魔力を圧縮させる。二十人いた陰陽師達の霊力の総合以上ある。
「ふん」
清明の指示通り投げつける。
幼女の見た目とは反し、投げられた玉は高速回転をし地面を抉りあげながら進む。
自分で指示しておいてなんだが、あまりにも大きい魔力に冷や汗が額を滴っている。
着弾すれば一溜りもなく、如何に清明とは言え死は必死。避けるのが普通だが避けず、鏡に魔力玉を映し待ち構える。
数秒後・・・ 魔力玉は八咫鏡に激突。
「くッッウウウウウウ！」
足に力を込め吹き飛ばされないように踏ん張る。数ｃｍ身体が後退した所で鏡が異様な光を放つ。
そして、魔力玉はオーフィスの方へ逆走する。
「？なんで」
右手を前に突き出し手を開いてなぜ魔力玉が跳ね返されたのか小

首を傾げる。
最初に投擲した時と同じ魔力量に同じ速度。まるで、そのまま跳ね返されたようだった。
手の平に魔力玉が当たった瞬間握りしめ魔力を散々させる。
―普通は自分の攻撃で傷ぐらい負うと思うんだけどな・・・ 耐えちゃうか。
余裕の表情を崩さず僅かに燃えた服の袖を突き出しているオーフィスを見据える。
「今のが八咫鏡の能力で、全魔力を問答無用で反射するんだ。びっくりしただろ？」
「凄いびっくりした」
嘘つけ。心の中でその言葉を吐き捨てる。
これにて自身の手札を全て明かした清明の首には、死神の鎌がその時を待つように添えられている。
首を軽く二回回してから、一度深いため息を放つ。
「さて、続きをやろうか」
「うん」
無数の魔力弾を放つ。
そこに手加減や油断はなく広範囲に避ける場所を与えない。
八咫鏡を前へ突き出し自分に当たる魔力弾を全て弾き返す。剣を土と平行にして突貫する。
速度は山を移動した時より数倍速い。
駆け抜けた道は一段下へ凹み、高速で動くため自然発生したソニックウェーブによって木がなぎ倒されていく。
「はぁぁぁぁぁぁぁ〝ぁぁぁぁぁ〝〝!!」
全力全開の突き。刃のない剣だが受ける訳にはいかない。
回避の他に選択は存在せず、身体を横に大きく捻り剣先は先程までオーフィスの居た位置を貫く。
目の端で行方を追っていた清明は、剣を右下へ振り下ろす。身体を捻っているオーフィスに回避の術はない。
「次元の裂け目（ディメンション・エリア）」

小さく呟くと、小さな身体は一瞬にして消える。光の速度よりも速い。
剣は空気を両断し地面へ突き刺さる。当たると思った斬撃は空を切り終いには姿を見失った。
慌てて周りを見渡す前に、後頭部に重い衝撃が走る。
「がはァッ！」
「終わ・・・ 何これ？」
暗殺者などが使う首を叩いて意識を失わせる技を真似して使ってみたのだが、叩いた直後から身体全部が札となってオーフィスの身体全体に貼り付く。
【呪符分身】清明が考案し自分だけが使えるオリジナル陰陽術。効果としては分身を作るだけのシンプルな物だが、その凶悪性はその先にある。
ある一定の攻撃を受けると擬態を解除し、攻撃してきた物へと自身を構築していた札を貼り付ける。
そこから放つは清明の霊力全力の一撃。
「邪を払い浄化せよ、急急如律令」
淡く白い光を札達は放ち、一秒も経たずに大爆発を起こす。
【呪符分身】と交代し無事だった清明は、木の影から顔を覗かせ爆心地を見つめる。
爆発により舞い散る砂や草木が収まり、爆心地が視界に収まるとすぐに呆れた声を零す。
「ですよねー」
「肩こりとれた」
「今ので肩こりか・・・ 笑うしかないわ」
隠れるだけ無駄だと判断し木の影からゆっくりと全身を見せる。
「いつ入れ替わった？」
目を離した時は一度たりとも無い。なのにいつ入れ替わったのか？純粋な疑問を問いかける。
あの奇天烈な手はもう使えないなと諦め手品を明かす。
「八咫鏡で跳ね返した時だよ。僕が受けた時に既に分身を作っておい

て、跳ね返したら隠形で気配をして隠れたんだ。どう？答えはお気に召したかな？」
「大満足。お礼にこれ上げる」
　人差し指の先に小さく魔力を圧縮させる。その位置で固定したまま、指を指すように清明に向ける。
「デスビ」
「待ってくださいお母様」
「ん？紫何」
　清明を殺すはずだった攻撃を止めたのは陰陽師達ではなく、オーフィスの娘八雲紫だった。
　スキマから現れた紫は、フリフリの紫ドレスを揺らしながら地面へ足をつける。
「安倍晴明、彼には利用価値があります」
「利用価値？」
「はい。今ここでは言えませんが、幻想郷に関わることですので」
「なら、いいよ。我はもうやらない」
「ありがとうございます。お母様」
　医師を汲み取ってくれた母に深く頭を下げ、未だに何が起きたのか分からずキョトンとしている清明の方に身体を向ける。
　―えっと・・・ 多分彼女も妖怪なんだろうけど、何で助けたんだ？それに幻想郷って何よ
　彼女は美しい。今まで会ってきた女性の誰よりも魔性の魅力がある。ずっと眺めていれば命を吸われてしまような。
　扇子を振って開き口元をすべて覆う。
「貴方の命を助ける代わりに、私達に協力できるかしら？」
「妖怪が助ける？随分と面白いことをいうね。僕は君達を大量に始末してきた。敵のような僕の命を助けるなんて無駄な事を」
「シエルと言ったかしら、彼女も助けてあげるわよ？」
　ピクリ・・・ 表情が変わる。
「何でそんな事を僕に関係な」
「貴方が彼女にどんな感情を向けているのか全て把握してるわよ。私

達には心を読むスペシャリストがいるのよ、それともここで語った方がいいかしら？」
「……　本当にシエルを助けてくれるのか？」
「ええ当たり前よ。私達妖怪は約束を違う事は絶対にしない」
―信じるべきか信じないべきか…　断ればどうせ殺されてしまう。だからと言って助けてもらうのも……　いや、自分のことなんてどうでもいいだろ。今はシエルを助ける方が先決だ。
十秒程唸るように考えた清明は、剣を投げ捨て手両腕を上に上げ諦める。
「分かった、なら契約を結ぼう」
「話が分かる人間で何より」
紫の策略により清明は人間側を捨て妖怪側へと着く事になる。

む？誰だ？誰だ？・・・　もちろんワシだよ！

二人の怪物の決着が着いた中、最初の戦闘現場では未だに続いていた。

「ふッッ！」

「あ〝あ〝ぁぁぁぁッ」

一体何度目だろうか攻撃を当て吹き飛ばしたのは。

―異常だ。なんだあの耐久力は、まるで雲を斬ってる気分だ。

エクエスの放つ斬撃は回避の疑い一つないほどにシエルに放てている。人間であれば上半身と下半身のお別れコースだ。

なのに、いくら斬っても斬っても平然と立ち上がり、狂戦士（バーサーカー）のそれらしく力に任せてカウンターをしてくる。

力も人間のソレとは大きくかけ離れていて鎧の凹凸が徐々に目立ち始めている。あと、一時間以上繰り返せば粉砕は必至。

「厳こっちを手伝え！」

「無茶言うな！こちとら―あっぁうぜぇっなオラ！」

横目で見ると防御担当の十五人に攻撃を阻まれ、残る五人にちまちまとダメージを負わされているのが分かる。

そのせいでイライラしているのか、声を荒らげて突撃している。

（こっちはこっちでやるしかないのか）

さてどうしようかと考える間もなく連結した【蛇腹剣】が横薙に払らわれる。

「それは、フェイントです。本命は蛇腹剣で身体を拘束してきます！」

背後の木影から放たれた可愛らしい成長しきっていない幼女の声に反応し、剣を避けるのではなく地面へ肘落としを行う。

【蛇腹剣】にしようと関節を緩めていたので、カランっと金属音がなりバラバラに地面に横たわる。

これで、当分の間【蛇腹剣】を使うことは出来なくなった。

武器を失い攻撃手段が無くなったただの人間に、エクエスの渾身の

蹴りが突き刺さる。
「がはっ―」
蹴られた衝撃は凄まじく口からは血潮が飛ぶ。
妖怪の筋力に任せた蹴りは少女の陰陽術で強めた防御を破り骨をたやすく粉砕した。
地面を数回バウンドしてから、大回転を繰り返し太い大木にぶつかる。大木は少女が当たった事によって根元から折れる。
「助かったさとり」
「よかったです。にしてもまだ片付いていなかったんですね」
桃色の服に身を包んでいるさとりはやれやれと言いたげな表情で姿を晒す。
先程の背後からのアドバイスは、心を読む事ができるさとりだからこそである。
「にしてもなぜ出てきた?戦闘は苦手だろうに」
「緊急事態なので、私がいつまでも籠っている訳にもいかなくなりました」
「何があった」
はいと一呼吸置いてから要点をまとめて説明する。
「陰陽師以外にも敵が現れました。発生原因、発生理由は一切不明で分かっているのは魔獣である事と、私達妖怪を捕食することです。
被害数はすでにかなり大きくなり、確認が取れなくなったのは百に及ぶと」
「そちら側だけで安全が取れなくなったから、私達に援軍を頼みに来たのか」
「はい全くその通りです」
エクエスはかなり脳筋の節があるがそれでも厳ほどバカではなく、ある程度頭の回転は早い。
さとりの簡潔な説明でもその危険性を理解して空から降ってきた頭をキャッチして唸る。
初めて対面した時から心を読んで正体を知っていたさとりは腰を抜かすほど驚かないが、知っていても改めて生で見ると多少は驚いて

しまう。
「おい！そこイチャつくな！こっちに援護よこせよ」
二人が見つめ合いまるで時が止まったように動かなくなった事に、痺れを切らし戦闘の最中に怒鳴る。
そうかと頭を脇に抱え――ずに上空へ投擲する。
「気づかないと思ったか小娘！」
「死ねぇぇぇぇぇ!!」
ひっそり気づかれないように連結させた【蛇腹剣】で突きを穿つ。
不意をついたであろう一撃も、警戒を一切怠っていなかったエクエスには不意打ちにならない。
切っ先に集中した霊力に対し、同じく剣先に妖力を集中させ衝突させようと前へ突き出す―その刹那四人に悪寒が走る。
「きしししし、素晴らしい・・・ いい餌がこんなに転がっている」
ボロボロのいかにも貧困と言った服装の小さな少年はその場にいる、全員に向けて言葉を言い放つ。
年齢は六歳そこらだろうか。まだ自意識は産まれておらず、欲望に忠実なはずだ。しかし、目の前の子供は異様だった。
二本の足で地面をしっかりと掴み背筋が曲がっていない。顔には不気味で不適な笑みがあり、笑い方がかなり特徴的だ。
その笑い方を覚えていたシエルは恐怖しながら言葉を零す。
「蘆屋・・・ ど・・・ う・・・・・・ 満」
「きしししし！大正解。褒美だワシの嫁にしてやろう」
冗談を言った父親のように声のトーンを何段階も上げて声を出す。
両手を広げさぁ！と思わす行動をとる。
「誰がお前なんかに」
「そうかそれは残念だ・・・ ワシ悲しくてこの国沈めちゃいそう」
現れたのは十mは離れていた位置のはずだ。なのに、今一歩歩いただけで背後にテレポートしたようにさも当然のようにいる。
身の毛がよだつとはこの事なのだと初めて理解した。背後に立つ負に向くことが出来ない。向けば精神が壊れるそう感じている。
それは宿敵も同じようで石のように身体全身が固まっている。

「三食昼寝付きの夜伽ていどぞ？」
「嫌だ」
「むっ、ワシ初めて振られてしもうた。清明とは熱く拳を交えたのに・・・ ショックじゃ」
　ベラベラと陽気に一方的に喋り続ける。
　弱い犬ほどよく吠えるなどと言うが、絶対的な強者は会話すらも楽しむ。強い犬ほどよく喋るだろうか。
　ルンルン。スキップ気味にシエルの周りを一周して顔を近くでマジマジと見つめる。
「いやーやはり好きじゃなロシア顔。もう一度告白すれば答えは変わるかのう？・・・ 手土産に清明の首でも差し出せば」
「ゲスが」
「きしししししし!!その顔、ワシを軽蔑するその表情が何ともいい！もっとだ、もっとワシに」
「シエルさんから離れろクソガキ！」
　遠くにいた陰陽師達はシエルの先程の呟きは聞こえておらず、体感でいうならば変態幼児がシエルさんにちょっかいをかけているように見える。
　せっかくのお楽しみの時を奪われた道満は身体を動かさずに、首を九十度回転させゴミを見据える。
「ひ、ふ、み・・・ 二十か。大して腹は膨れんだろうが、まぁよい。食していいぞ可愛い可愛い我が子よ」
「なに―」
　陰陽師達の言葉が続く事は未来永劫ありえなくなった。
　地面から伸びる、狐の尻尾、凹凸のない長く尖った角、ゴツゴツした鬼の腕・・・・・・ 二十に及ぶ他種族の攻撃が陰陽師達二十人に突き刺さる。
　そして、刺さったその場から一瞬で水分を奪われたように干からびていく。
　まるで蚊を殺すようにあっけなく、簡単に人の命が散る。
「どうじゃ、美味しかったかのぅ？」

虚空へ声をかける。その声に答えるように虚空はヒビ割れそこから、幾千もの繋ぎ目が身体に走っている化け物が現れた。
人形ではあるが全容は優に二mは超え三mはある。その上顔はグチャグチャに潰れていて一体何なのか理解が及ばない。
その正体を知る由もない三人は不気味な嫌悪感に身体を震わせる。
「おえっ・・・ ぁぁ・・・・・ うぉえ」
ただ一人、心を読む事の出来る彼女だけはその正体を視てしまう。
繋ぎ目でくっつけられているのは生きている妖怪達であり、種族も年齢も全部バラバラ。中には隣山で見た事のある妖怪もいる。
だが、一貫して全員が同じ言葉を訴える。
?死にたくないよ、助けて助けて・・・ 殺してくれ早く楽に?
臓器は外され皮膚としてしか活用されていないのに関わらず、そこに何故か意識が宿り死んですらいない。
内蔵の方からも同じような声が聞こえ、目の前の怪物は全てが妖怪達のパーツの詰め合わせあるのだと考えつく。
と、なると何故ここにそんな物が来たのか・・・ そんな事語られなくても分かる。自分達も同じようにパーツとして組み込むのだと。
余計に吐き気が上がってくる。
無限を見た時よりもおぞましく気持ち悪い。目すらも合わせることが出来ない。
死にたくなる。
「どうやら、本質を見抜いたようじゃな!きしししししし、いいのぅお主のそのパーツ・・・ 欲しいなぁァァ」
顔を歪めてさとり物のように見た目ながら言葉を吐きかける。

復讐鬼と首なし騎手

血の気が引くのが分かった。
人間に見つめられ、パーツと見られ、心の内を逆に視られたような気分。
地面に下ろした視線を上にあげられず、地面とキス寸前まで近づいている。
「おやおやどうしたのかな?さとりちゃん」
全身を舐められるような気持ち悪さが声に篭っている。
逃げろ逃げろと全身が警鐘をするため身体を震わせる。ビクビク—ビクビク、陸に上げられた魚のように小刻みに。
そんな中でもアレは近づいてくる。
一歩近づくことに身体から滝のように汗が流れる。抜けた腰ももう戻ることは無い。

ニゲラレナイ

「それ以上行かせねぇよォォ!!」
龍が吠える。
その声に安心したのか身体の硬直が緩み、上へ顔をあげられる。
「大丈夫かさとり。ちっと待ってろよ、すぐ片づける——龍人化」
左右の手を胸元で交差させて呟く。その呟きに身体から光の粒子が漏れ始め、天高く上がっていき全身から粒子が出る頃には全身が変化している。
爪は長く鋭く伸び、腕から肩、首、顎にかけて龍の鱗が発生する。瞳には縦に金色の一線が入り、眼光は常時の数倍以上に鋭い。
歯は全てが牙のように鋭く変貌し、口から漏れる蒸気は体内の温度の高さを示す。
「素晴らしい!素晴らしい!あぁ今宵はなんていい日なんじゃ、こん

ないいパーツが転がっているなど」
「誰がパーツになるかよ、なるのはてめえだ」
身を微かに屈め突撃の構えを取る。道満は笑っているだけで避けようとしない。
「ふッんん!」
地面を吹き飛ばす。
地面深くに沈んだ足跡だけを残し身体は光より速く加速する。普段であればこんな速度を出せば肉体は一瞬で肉片と化す。
だが龍人化した状態ではそうはならない。
龍が人間へと姿を変るのには利点がある。
巨体の時と比べ動きは速くなり、被弾率も回避率も上がる。
燃費が良くなり大量の供物をひつようとしなくなり、それこそ人間と同じ量で十分事足りる。
しかし、利点ばかりとはいかない。
殆どデメリットは無いが一つだけあるのだ、それは放出魔力量の低下だ。
例えならば龍の状態では太い筒に水を一気に流している状態であり、水の量は大量に流すことが出来る。
だが一度人間になればその肉体に収まるように筒のサイズは小さくなり、流れる水の量は激減する。そのため、人間体では本来の力を発揮できない。
そこを克服するために巌は肉体の一部を龍に戻す事により放出魔力量を格段に上げる事が出来た。
肉体の基礎防御力も上がり妖怪の中でもトップと言っていい力を得た。それでもオーフィスに挑んだらあっさりと負けてしまったのだが……
その話は相手がオーフィスであったからであり、人間相手であれば苦戦どころか余裕で潰すことが出来るはずだ。
「なッ―」
「きしししし、勝ったと思ったか?残念じゃな… その程度小指で十分」

渾身の一撃を苦もなく小指一つで止めた。
ありえない。そんな事を考える暇なく地中から触手のような物が腕を切断する。
空に飛び上がる右腕に咄嗟に反応し噛み付いて、後方へエクエス達の元へ戻る。
腕を切断した気色の悪い化け物を睨みつけながら、切断面同士をくっつける。
「厳大丈夫か？」
「ぺっ・・・ 問題ねぇ。こんな屁でもねぇよ」
「そうか・・・・・ ならいがみ合っている場合ではないな小娘」
「なんだと、どういう事だ！」
厳の働きにより二人も肉体硬直が解け自由に動き回れるようになる。
現戦況を鑑みるにこれが最優の手だろうと、意識を外した瞬間に殺そうと剣を構えている少女へと声をかける。
突然声をかけられた事に驚いたのか声を荒らげながら聞き返す。
「このままで居れば四人とも、あそこの人間のように殺されるぞ。それではお前の復讐は叶わんぞ？」
「だったら今ここで殺す」
「ならば、俺はあそこに突っ込み死ぬがいいか？」
復讐に取り憑かれた少女に自身の肉体を人質に交渉という名の脅しをかける。
その答えに苦虫を噛み潰したような表情を取り、俯いて肩を震わせること数秒・・・ 覚悟を決めたのか顔を上げ剣先を向ける相手を変える。
「・・・ い・・・・・・ だ」
「ん？」
「今だけ協力してやると言っている。全てが終わったら貴様の首を掻っ切ってやる」
「いいだろう、首なしの私の首を掻っ切れる物ならな」
「うるさい」

今まで向き合ってしかこなかった二人は始めて肩を並べ一人の敵と向き合う。
「気をつけてください。後ろのあの化け物は生きた妖怪の集合体です。下手に切れば死んでしまいます」
「めんどうな事してくれたなあいつ！」
くっついた切断面から煙が立ちがあり、接着待ちをしている巌はさとりの説明に怒りを露わにした。
エクエスが自身の肉体を人質に取ったように、道満は大勢の妖怪達を人質に取っている。そのくせ人質はこちらを攻撃してくる。
倒すに倒せない邪魔がいるのだ。邪魔くさくて仕方が無い。
「なるほどな、となれば分かっているだろう小娘」
「指図をするな妖怪風情がァッ！」
「全く血気盛んな小娘な事だ！」
頭をさとりに持たせてから動き出したので、少女のスタートから少し遅れて接近する。
「うがァァッッッツ！」
狂戦士は三度唸る。目に理性はなくあるのは殺意のみ。
背筋が凍る殺意を全身に浴びる少年は微笑む。まるで子を包み込む母のように。
だからなんだ。罠があるのか？カウンターがあるのか？そんな物関係ない。出来るのは剣を振るうことのみ、それが出来なければ私の価値は無いのだから。
胸元にある三種の神器が一つ【八尺瓊勾玉】が紅白い輝きを放つ。【八尺瓊勾玉】の効果はその土地の恩恵を受けることが出来るもの。地脈と繋がり霊力を高めるのが本来の使い方だが、この場所においては違った。
妖怪達のみに授かるはずの祠の恩恵をシエルは人間でありながら受け取っていた。
そのおかげでエクエスとの殴り合いでも不死身のような立ち上がりを見せ、自身より強くなっていたエクエスに喰らいついていた。
【蛇腹剣】には全身の霊力が込められ防御を捨て諸刃の剣の一撃だ。

「あの子を狙えないならワシを狙うと・・・ いい判断だが、いささか考えが甘いぞ！」
防御の失った少女を見逃すはずもなく影に霊力を込め四本の刃と化して切り返す。
鋭い影が少女に接近するも避ける素振りひとつ取らない。それは無謀のように見えるがある確信があるからだ。
「まったく使い方が荒いな！」
四本の影刃はエクエスの一薙に容易く四散する。
それはいがみ合っていた者達から考えればありえないコンビネーションだった。
そもコンビネーションをす戦闘で行うには何十年も一緒に特訓を続け、相手の癖・性格・能力を理解して尚且つ信用しなければ生まれるはずがない。
熟年のコンビでも失敗する事は多く、成功する確率はかなり低い。だが、この二人は違った。
―私の標的ならばこのぐらい余裕。
―小娘ならばこうするだろう。
いがみ合い研究に研究を重ね続けた二人だからこそ、相手の実力だけは信用し安心して背中を預けられている。
見事という他にない完璧なコンビネーション。攻撃を防がれた事に驚き回避が遅れた少年に刃が―

突き刺さらない。
【蛇腹剣】は根元からへし折れ、手にはまるで鋼鉄に素手で殴ったような重さが残る。
「きしししし、言ったろうに・・・　その程度勝ったつもりかとのう」
再び影の刃が切りつける。
今度は四本などと少ない数ではなく、数えるのすら馬鹿らしくなる量だ。
捌ききれないそう判断したエクエスの動きは迅速で、シエルを抱き抱え護るようにし影刃を全身に受ける。

僕が来た!!!

少女の視界は唐突な闇に覆われた。
その直後に全身にとてつもない衝撃が訪れ、身体のあちこちに激痛が走る。刃物で肉をえぐられたような痛みだ。
三秒かけて痛みが徐々に引いていきどうにか起き上がれる程度の力を取り戻す。
「じゃ・・・ まっ・・・・・」
自分に寄りかかるように乗っている闇をどける。空から明るい暖かい光が降り注ぐ。
眩しい中でもゆっくりと目を開いて自分に何が起きたのか確かめる事にした。
「なんで・・・」
「小娘・・・ 貴様を殺すのは・・・ この私だ・・・・・ 他の奴に殺されるなんて、真っ平御免なんでな」
本来は彼女の肌を貫くはずだった攻撃をその身一つに受けた、無様なエクエスの姿がそこにある。
復讐の相手に助けられた。とてつもない侮辱にほかならない。
「ふざけるなぁァ!誰が助けてなんて言った!・・・ 絶対に生かしてやる。死なせない、こんな所で死んだらあの世で何度も殺してやる」
「なんで負けることが前提なんだ?」
「貴様こそ死ぬ前提はやめろ」
重いエクエスの身体に挟まれ身動きが取れなかった下半身を引っ張り出して立ち上がり、腕を掴んで引きずりながらさとりの方へ向かう。
妖怪を『祓う』力は持っていたが『癒す』力は持っていない。いや、持つ暇が無かったと言い換えた方がいい。
剣術を極め攻撃呪術を習得する。その事だけを重点的にやってきたシエルは、治療なんて当たらなければどうということはないと鼻で

笑い練習してこなかった。
　そのツケが今ここで巡り巡って来た。
「今なら殺れるぞ・・・　やらないのか？」
「万全な貴様を倒してこそ意味がある。父を殺した貴様の力をねじ伏せ、そこでやっと私の剣術が最強だと、父の力が最強なんだと胸を張れる。
　なのにこんな所で犬死なんかさせるものか。絶対に殺す、殺す、殺すからこそ生かす！」
「滅茶苦茶だな、支離滅裂だ」
　引きずられながら語る言葉に力強さがない。
　妖怪達に与えられる祠の恩恵も弱り始めているのだ。本格的に死が近づいているのがわかる。
　霊力の殆どを使い果たしたせいで身体能力は強化できず、どうにか引きずっているがまだ一ｍも動かせていない。
「ワシそんな顔見たくないんだよねぇ」
　足の下にある自分の影を数回リズムよく軽く踏む。
　すると、影は標的を少女に定め直角四角形を半分にした形で、シエルの右手・左手・右足・左足・首を拘束し背後の大木へ縫い合わせる。
　真顔で近づく子供は近づきながら指で音を鳴らす。
「もっともっと・・・　もっと！絶望し、失望し、消失し、崩壊し。
　希望も何もかもを打ち砕かれた君の顔を見てみたいのぅ。だからな、選ばせてやろうと思う。
　一生復讐の機会を失うか、今すぐここで死ぬかな。
　どちらを選ぶ？五秒まってやろう・・・」
　子供は指を全て立てカウントを行う。
　そんな事を腕がくっついた巌が放置している訳もなく、視界の端ですら見ていない子供へ拳を振り抜く。
　ボディーガードの役目も持つ、全身縫い目まみれの怪物が難なく受け止める。
「離せよ化け物」
　掴まれた腕を離させるため回し蹴りを入れようと腰を捻った時だ

さとりのさっきの言葉が脳裏をよぎる。
『あの怪物は妖怪の集合体です』
　同胞の数多の妖怪達が笑う姿を覚えている。そんな彼らのことを思うと殺すことなんて出来るはずもなく、自然と足は地面へ降りる。
「愛などと言う不完全な物に支配されるからそうなるのじゃよ。愛など不要だと言うのに」
　他人に『愛』を覚え非情になれない妖怪を一見し、大木に張り付いている少女へ歩を進める。
「五…　四…　三」
　指を一本ずつ折って残り時間を告げる。
　息が上がり、緊急事態に脳は正常に動かず決められない。呼吸が徐々に早くなるのが分かる。
　心臓は爆音を鳴らす。汗は額から滝のように流れ落ち、動悸はカウント以上に早い。
「二…　い」
「こ……　せ」
「なんじゃ？ちと声が小さいぞ」
「殺せ！私を殺せ！」
　死ぬ覚悟を決めた。
　優しい清明の事だから助けると言って突っ込んで来るのだろうけど、人質となったらその手を止めてしまう。彼はそんな人物なのだと知っている。
　――だったら私が死ぬしかない。死ねば足でまといは居なくって、あいつを倒せる。清明後は任せた…　出来ることならこの感情を伝えたかったな。
　もう泣き言は言わない。そう決めた少女の目には生気と頑固たる意思が宿る。
　絶望を切り捨て希望を繋ぐと。
「そうか、そうか。うむ、選んでくれたか……　だが、ワシが言って何だが選ぶのは酷なことだろう。だから全てくれやる、感謝するが良い」

指を鳴らす。音に反応し道満の下の影が細く長く伸びる。
立体的に浮かび上がり少女のこめかみの横に軽く触れる。何をと聞く前に道満は笑う。
「痛みは一瞬じゃ、そうすれば両方奪ってやるぞい」
―刹那、影は少女の頭を貫く。衝撃は全身に走り身体が仰け反る。だが、血は流れない。
貫通が終わると影は元に戻っていき、拘束していた影も消える。
支えを失った少女は重力に従いうつ伏せで地面に横たわる。
「なっ・・・ んで」
拘束を離した意味が分からないが好機だと襲いかかろうとし身体に力を込めるのだが、身体はピクリとも反応しない。
首から指先まで何もかもが動かない。まるで石化したかのように。
「なぜ?・と思っておるのか?・簡単な事じゃよ。人間とはな、脳から動かす情報を電気信号を神経を通って伝え身体を動かすのじゃよ。
だから、ワシはその神経のみを切り裂いた。いや破壊したの方がいいかのぅ。
腕や足を切られたなどの大きな傷はな治すことが容易い。くっつけるだけなのだからな、しかし脳は繊細でな治療がままならん。
ここまで言えば分かるな・・・ そうお主は、人間として生きることも復讐も果たすことも両方出来なくなったと言うことじゃよ!!
きしししし!!死とは簡単だ死ぬだけなのだからなぁ!・生き地獄からは逃げることはできんぞぉぉぉぉぉ!!」
高笑いが凍りついた脳を支配していく。悪魔に心臓を握られている。そう思ってしまうのも仕方が無い。
死ぬにも一人では死ねず、人間としては他人に頼らなければ生きていけなくなった。
復讐をするために剣を握る事が出来なくなり、憎悪の炎に燃えるただの肉塊になった。
「あ〝っぁ〝っ〝っ〝ぁぁぁぁ」
「悲鳴か?・絶叫か?・絶望か?・きしししし、その声やはり心地よいのぅ。

美しく気高い女子が落ちる時の声は堪らん。滾ってくるぞぉ!!
顔を!顔を見せておくれ!!」
身体が動かない少女に抵抗の余地は無く首を握られながら持ち上げられ、気に押し付けられる。
振り向くだけで男を虜にした美貌は崩れ去り、涙と鼻水で汚く汚れていた。惨めな声を垂らしながら。
それに道満は歓喜の声を上げて喜ぶ。身体だけは大きく仰け反り、声はさらに大きくなる。
道満の笑い声は森中に木霊し絶望はすぐそこまで近づいてくる。
――清明・・・・・ 助けて
壊れかけの心に残っていたのは最愛の英雄(清明)だ。
醜く助けを乞う。無様に助けを乞う。嘲笑われながら助けを乞う。
天から下げられた細い細い希望に縋る。

英雄とは遅れてやってくる。
「その汚ぇ手を離せよ」
興奮し辺りの警戒を忘れていた道満の顔面に拳が深くめり込む。
骨の軋む嫌な音が鳴り、手が緩んで少女を離して吹き飛ぶ。
怒気の篭った声を言い放ち、少女助けた英雄は最後の最後まで信じたその人だった。
「ごめん遅くなったよシエル」
「ぜいめい〟ごめん」
「はは、なんで君が謝るのさ。謝るのは僕なのに」
いつもの彼だ。こんな、惨めな姿になっても彼は捨てること無く温かく包み込んでくれる。
「だからさ、ちょっと待っててね。オーフィスさん準備は」
「もちのろん余裕。可愛い子をいじめるクズは殺る」
「そうですね。僕の女に手を出したんだ、覚悟をしてもらいますよアイツには」
「随分なご挨拶じゃな!清明にオーフィス!!」
ここに役者は揃った。

人間であることを捨てた蘆屋道満
人間の頂点に立った安倍晴明
人外の頂き『無限』のアン・オーフィス
三人の人外はこの日始めて会合した。

三枚おろしはやめられない。

「お前がやったのか?彼らを・・・ シエルを!」
「そうじゃよ清明。そこで干からびた奴らは、ワシの子供に食わせてやったわ」
「道満んんんん!!」
干からびた彼らに地に伏せている少女。彼らを見て人間を人間とも思っていない元人間に怒りの形相を向ける。
握りしめる拳からは指の隙間から血が滴る。爪が肉に食い込み血が流れているのだ。
そんな彼の視界を遮るためにつなぎ目まみれの怪物が入り込む。
ケケケケ。口が無いのに空気が振動し怪物の方から音が聞こえる。
「邪気よ無に還れ―急急如律令ッッ!!」
血が滴る人差し指と中指で挟んだ【呪符】は真っ白な光を纏い、光の線が怪物に向けて空間を彩る。
光が怪物に当たると光が怪物の全身を包み込み、清明は指を捻り下へ向けて切り裂く。
魔を祓う一撃。
怪物ならば聞くはずの攻撃は怪物には効かない。
包み込んでいた光は欠片として霧散し顔はないが何食わぬ顔でいる。
「呪術体制は無論つけておるわ」
「だとっしても!」
「我がやる」
清明の攻撃を傍観していたオーフィスは前に一歩出る。その存在感は一つの山の如し。
オーフィスの中の彼はごく一般の人間だったのだ。そんな彼が怒らない訳もなく、表情に出していないが放たれる圧力(オーラ)に怒気が含まれている。
圧力(オーラ)は大気を揺るがし全員の動きを封じる。

「ダメです。その怪物は」
「知ってる・・・ ううん、違う。視えてるから大丈夫」
血に倒れているさとりがよく目を凝らすとオーフィスの頭の真横に一つの球体が浮かんでいるのが見えた。
―そんなアレはまさか！
見間違えるはずがない。それは自分の存在が存在する所以なのだから。
第三の目【サードアイ】と呼ばれる物体である。覚妖怪の生き残りさとりとこいしのみが所有しているはずのそれは、オーフィスの横に当たり前のように存在している。
違いと言えばカラーリングが漆黒の黒なことだろうか。
ちなみに、オーフィスのそれは心を読むことは出来ず、筋肉の動きや魔力や気の流れから動きを予想しているに過ぎない。
それでも的中率は九九％なので問題ない。その事を知らないさとりが驚いていると次に巌が驚きの声を上げる。
「なっんでだよ」
「龍人化」
まんま巌の使った技と同じで鱗が浮かび上がっている。爪は長く伸び何ものを切り裂く鋭利さとなる。
同じ龍が元であるオーフィスなら使ってもおかしくない技だが、巌は一度たりとも教えていない。
オーフィスに戦闘を挑んだ時しか見せておらず、ましてやこの技を他の奴に見せたり教えたりしていないので覚えるのなんて不可能なはずだった。
擬似心を読む【サードアイ】に龍の力を発揮する【龍人化】
二つの技はオーフィスの実力を数倍以上に底上げしている。
「その技はワシは知らんぞぉ！まさかそんな物を隠していたなんてな！」
そんな事を露も知らない道満は歓喜の声を出す。
龍人化した事により放出魔力は格段に上昇し、身体から漏れ出た魔力により天候が悪化していく。

太陽の光は黒い雲に隠され、雷が轟く。
「避けないなら余裕」
爪を立て怪物をなぞる。ダメージが入る威力ではない。怪物ですら頭を傾げている。
ダメージが無いならと大きく右腕を振り上げ—上空でバラバラに裂けた。
裂けたと言っても適当ではない。つなぎ目に沿って切断されたのだ。
拘束から解除された皮膚や骨らは元の妖怪の姿へ戻ってから地面に落ちていく。種族は多種多様で、絶滅したと言われた妖怪も居る。
「やっぱり。強制的にパーツにしてた」
「まさかバラされるとはわなぁ・・・それでこそ無限の龍人だ。私の次の身体に相応しい」
幼児は前髪をかきあげそこにあるべきではないそれを見せる。
こめかみから一直線に反対のこめかみに向け青白い線が伸び、眉間の辺りで円をつくるため屈折している。
円の中心には【憑】の一文字が線と同じ色で浮かび上がっている。
▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽
—うげっ、何アレ・・・タトゥーともまた違うし、安倍晴明がいるぐらいだから陰陽術かな?にしても憑とは安直な
【憑】とは憑依の事を指しているのだろうなと、あまりにも安直な事に呆れている。
「じゃがもう少しそやっと遊ぶがよい」
『KEYYYYYYYYYYYAAAAAAAAAAAAAA!!』
片腕を喪った怪物は雄叫びとも取れる奇声を上げながら、オーフィスに突貫する。
消失した腕の先から赤ではない緑色の血液?が流れ出ているがそんな事お構い無しに。
—キモいぞ!さっさとバラすか・・・三枚おろしのイメージで
獲物が自分から突っ込んでくるのは楽でいい、無駄な手間が省けた

と感謝しながら迎撃の体制に入る。
先程は一本の指だけでバラしたが、今度は親指・人差し指・中指を龍の腕に似せた形を取り、頭上高くから振り下ろす。
腕はムチのようにしなり、地面に指が刺さるころには真空刃として斬撃が飛んでいる。
怪物に当たった斬撃はつなぎ目に沿いながら身体をバラしていき、一秒もかからずに元の妖怪へと戻す。
「隙を見せたな」
倒した直後が一番油断する。それは人間の標準であり、無論オーフィスも該当する。
倒し安心した直後に道満は指先を噛みちぎり、血液でオーフィスの額に一線刻む。
道満の額にあるように色は青白く変貌し模様もまんま一緒になる。
「この身は同じなりや。我が兄妹よ—急急如律令」
指を立て念じる。すると、円の中に【憑】の文字が浮かび上がる。
「これで貴様の身体はワシの・・・ なんだと！」
「何かした？」
接近した道満の腹部にオーフィスの拳が突き刺さる。
道満の陰陽術は何故か防いだようで、特に身体に以上はない。
—何したいのか分からないけど、まぁいいや。さっさと倒しちゃおう。
全力いっぽ手前の拳に空中でバク転を決めた道満を見据えながら拳を握る。

三人の怪物はこうして戦闘を始める。

山の頂上付近では逃げてきた妖怪達が溢れかえっていた。
どの種族がどれだけいるのか。確認のため点呼をとるも、混乱が酷くまともなデータが取れない。
そのせいでどこの辺りが酷く警戒せねばならないのかが分からない。全てにおいて後手に回ってしまっているのだ。
「朧花様!!未だ混乱が酷く」
「分かっている。確認のためさとりと紫を向かわせている。だとしても、ただ待つのも辛い。
やはり、こんな所で大人しく待つのは嫌いだ。私もそちらへ行こう。現状分かっている情報をくれ」
「こちらです」
数が大きくなればそれだけ災害時に混乱は大きくなる。分かりきったことにある程度覚悟をしていたので同様の色は見えない。
下級妖怪から簡単にまとめられた資料を受け取り、歩きながら流し目で情報脳内で統合していく。
妖怪達がここに根付いてから仕切ってきた大天狗の血を引いている朧花は、さすがと言うべきか縦横一mの紙にびっしりと書かれている文字を簡単に読み解き、的確な指示を飛ばしていく。
下級妖怪は軽く一礼をして急ぎ現場へと指示を伝えに行く。
――こちらは何とかする。だが、そう長くは持たんぞ。
戦っているであろうオーフィス達に心の中で呟く。
▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽
いくら人間を辞めたと言え、人外の中でもトップクラスのオーフィスの攻撃を受け、五体満足で普通に息をしている道満に厳達は少なからず衝撃を受けている。
無論それはオーフィス自身もである。
――なんか殴った感じがしないな。例えるなら……　語彙力皆無すぎ俺。

一人脳内ボケをするがツッコミをする者がいる訳もなく、虚しさだけが残る。と、そんな巫山戯ていると横にぴったりと清明が止まる。
「オーフィス殴った感触は？」
「ない」
「なら本体は別にあるはずだ。昔はアレに僕も翻弄されたからね・・・だからこそ対策はバッチリだよ―急急如律令」
道満の狡猾さ不気味さを一番知っている清明だからこそ、その手の内はいやと言うほど理解している。
オーフィスに殴られ多少の傷すら負わないのは明らかに異常である。さらにオーフィスの発言も加味すると、道満の十八番の幻術だろうと断定し周囲探索の陰陽術を起動させる。
人形に切りそろえた【呪符】は青く発光し独りでに宙へ浮かんでいく。
辺りを見回すように身体を何度も旋回させピタッとある一方を向いて停止する。
「そこか！」
声を出すと同時に木はへし折れ下賤な笑みを浮かべる道満が飛び出して、手から迸る雷を清明へ向ける。
「きしししししし！気づかれたならば仕方ない、死ねぇぇぇぇぇ!!」
「させない」
飛翔する電撃を拳で地面に叩きつけクレーターを作るのと同時に地球へ逃がしていく。
眼光は鋭く、ただ一点に敵へと注がれている。それに返すように道満も見つめ返す。
「簡単じゃよな。ワシの憑依ができないと言うことは、呪術抵抗が高いのでなく器の支配権が貴様の方が高いことを指しているのだな。であるからして答えは単純明快！弱らせて乗り移らせてもらおうかのう！」
今度は左右の手を黒い炎が覆う。自然界ではありえない黒炎。万物を燃やし尽くす漆黒の炎だ。
邪へと落ちた彼だからこそ使える物であり、その炎の前には何人た

りとも生きることは叶わない。
　オーフィスを倒すことの出来る数少ない力。だが、そんな物を出されておいそれと攻撃の番を譲るはずもない。
「ふわはぁぁぁ」
「ちょっ、僕一番近ッ―」
　肺が大きく膨れるほど溜めた空気を一気に吐き出す。空気は爆発したように振動を始め、咄嗟に耳を陰陽術で守った清明は良かったとして、防御の姿勢を見せていなかった道満は聴力を奪われる。
　それだけに収まらず、爆音は脳を揺らし体勢を崩させる事に成功する。
「紫、回収して」
「わ分かりました」
　遠くにいながら戦場の声を聞いている紫に指示を出し、道満が動けない内に負傷者と言うより怪物として融合していた妖怪達を回収していく。
　かかった時間は二秒にも満たない。
　だが、結論として紫にそれ以上の時間は必要なかった。無事全員を回収した紫はスキマすぐ閉じ、重傷の三人に手を伸ばす。
　厳はいいとして、エクエスや人間の小娘はこの場に居れば死んでしまう。
「我はいい。避難をして」
「シエルをお願いします」
　二人は後ろへは振り返らずに簡潔に言葉を告げていく。
「ダメだ・・・ 今の清明じゃ、勝てな」
「だろうね。ついさっきも負けたばっかだし・・・ けどさシエルを守れたらそれでいいんだ。僕の好きな女ぐらい守らせてよ」
「それはど―」
　今生の別れのように言葉を綴る清明に、少し頬を赤く染めたシエルは聞き返そうと声を出すも、言い終わる前にスキマへと飲み込まれ声は聞こえてこない。
　三人の収容を確認して二人の背中を数秒見つめてから自分もスキ

マへと入り消えていく。

「はぁ・・・ なんでこうなるかな。いつもこうだよ、何回死にかければいいんだろう」

「これからずっと」

「だよね」

「お別れまで待ってやったがもういいのか?」

「ありがと」

「どうせ後で死ぬか今死ぬかの違いだしのぅ。感謝されるような事でもないわ」

すっかりと聴覚を取り戻し服についた土埃を払う。その際に身体のあちこちから悲鳴が上がる。

筋肉は切れていき骨は何本か弾け飛ぶ。右目からは血涙を流し、生気にあふれていた少年の身体からは全く感じられない。

それが意味をするところは

「身体の限界。いくら乗っ取っても、器が小さいからすぐ限界くる」

「ご名答じゃよ。この身体は既に限界を迎えておる。あと一時間以内には崩壊するな。尚更、オーフィスお主の身体をいただくぞぉぉ!!」

黒炎を纏わせた拳を道満は振りかざす。黒炎は空気を燃やしその熱気をオーフィスへと向けている。

現状自分で出来ることを考え辺りを見渡した清明は、振り返って耳元で囁く。

「少し時間をかせいでくれないかな?オーフィスさん。やりたい事がある」

「おけ」

前衛をオーフィスに任せた清明は前線から離れ駆け出す。

逃げた。そう確信した道満は願ってもない一対一に感謝しながら、オーフィスの穿つ純粋な魔力拳をぶつけ合わせる。

旅立ちの夜前編

二人の拳は何度も何度もぶつかり合う。その結果植物は一瞬で枯れ果て、数百年植物が育たなくなる死の土地と化した。
死の呪力が無限の魔力を帯びて拡散されたせいだ。
「きしししししししししし！」
「チッ―」
その原因である二人の反応は相反している。
今までに感じたことの無い強大な力とやり会える事の喜びを道満は笑顔で表す。
オーフィスは魔力の制御に思った以上に手間取っている。【龍人化】した事により、今までより格段に膨れた魔力を制御するのは至難の業だ。
ただ無心に力を振るえば確実に道満は倒せる。だが、その後に残るのは数百年どころか永久に植物が育たない本物の死の土地になってしまう。
――あぁ、うざっ！めんどくさいなぁぁぁ!!
全力を出してるようで制限してる今は無性にイライラが積もり、時々全力の攻撃を放ちそうになる。理性と言う鎖で何とかしているがそれも持ちそうにない。
となると、期待するのは時間稼ぎをしてと言ってきた清明なのだが、横目で見ると背後をうろちょろするばかりで何も役に立たない。
「それそれそれ！さぁ、地獄を見よ！」
無遠慮に右腕から弾ける黒炎はオーフィスに接近するも、拳一つで難なく払われる。黒炎の森の侵食度合いはまた上がった。
一度防がれたなら二度目三度目を放つ。諺に数撃てば当たるとあるが道満の一撃一撃は質量も十分である。
上級妖怪など掠っただけで溶ける。それほどの威力を数打つのは異常を通り越して化け物である。
黒炎弾全てを弾き終え、辺りに広がった黒炎を眺めつつ敵を睨む。
「おかしい。人間がこんな力得られない・・・ 何をした？」

「まぁそう言うじゃろうな。一人間が無限と制限付きながらも対等―こりゃおかしいわな！きしししししし！」
返答はわざとなのかおちゃらけ、まともな答えが返ってくるとはとても思えない。
「しかして答えよォォ！ワシはなずっと貴様の身体を欲していたのだ。だからこそはるか昔、ワシの記憶にすら残っていない昔から他者を喰らってきたのじゃよォお」
芦屋道満。その出生は謎に包まれている。いつどこで産まれ何をしてきたのか。
近年突如として現れた道満は清明と死闘を繰り広げたりと明らかに常軌を逸している。その理由こそが他者の魂を喰らい続けてきたことに所以する。
魂にはある程度の器（キャパシティ）がある。それが大きいのが清明であって、一般人にも僅かながらにある。
それを道満は他人の魂をはるか昔から捕食し続け限定的な無限とも渡り合える力を得たのだ。
しかし、他者の魂を喰らうなど禁忌中の禁忌―そんな事をするのは人外や化け物だけと相場が決まっている。
その事実にオーフィスは哀れみの目を向け
「ゲス」
と、簡潔に一言を投げかけた。
「そうかそうか、確かにそうだろうな。じゃがそれをお前が語るのか？産まれながらの無限が弱者を語るのか!!」
「我は無限・・・ けど、それは力だけ。他の絆や思いは一番弱い」
道満は両腕を前へ突き出す。
すると、体内より莫大な呪力が両腕を覆い黒と赤い炎を両腕に灯す。赤と黒は混ざり合いそこに生まれるのは原点にして生物最大の弱点。
闇
生物は闇を生まれた時から恐怖し畏怖した。だからこそ人間は闇を払う火を作り、獣は闇を見抜く眼を得た。

生物である限り絶対と言っていいほど本能に刻まれた原初の恐怖はオーフィスにすら反応を与える。
禍々しいオーラを受け額からは汗が数滴流れ落ちる。
「気づいているなぁ？これを受ければ流石の貴様も無傷とはいかんぞぉ!!」
圧縮に圧縮された闇の球体はとても小さい。親指の爪程度の大きさだが、放つ圧力（オーラ）は惑星の消滅の時に発生する虚無（ブラックホール）にすら等しい。
それを道満は高速すら取るに足らない第三宇宙速度で撃つ。
「あっぁ、―」
視界では追えない。
勘すら意味が無い。
経験が機能しない。
惑星の重力すら意味をなさないその速度はオーフィスの胸を貫いた現象だけを知覚させた。
闇に貫かれた場所からは血が一切垂れない。されど何かが抜けていくそんな感じがした。
「あぁぁぁぁぁぁ！来るぞぉ来るぞぉ無限の力がァァァァ―いや無限に近い有限とでも言った方がいいのか？」
その通りだった。
オーフィスの力は無限だが、それは本当に無限なのか？そんな事を考えたことはしばしばあった。
結論としては無限に近い有限だとした。
理由としては明確な物はないが、本当に無限であるならばその存在が破綻していてもおかしくない。
無限の魔力。もし暴走すればそれは誰にも止めることは出来ない。そんな存在をこの世界を作った神が許すのか？という点である。
闇が貫いた箇所から何かが漏れ道満の力が膨れている。となると何が起きているのかはすぐにわかる。
「我の魂を喰った」
「その通りだともぉ・・・　しかし、人間では受け止めきれんか」
確かにいくつもの生命を取り込み容量を大きくした器であっても、

取り込んだのは無限の欠片。
少量であっても簡単に容量は崩壊し魔力を呪力へ変換する機構が暴走し始める。
少年の口目からは血が流れ、右腕は内側から爆発したように肉が弾け飛ぶ。
人間の器（キャパシティ）では不可能である。ならばこそ無限を耐えうるその肉体が欲しい。余計に欲しくなってしまう。
「きしししししし、さぁワシのために弱体化するがいい！貴様がワシを防げなくなるほど吸収すればのっとることなど容易じゃわ！ワシのしょ―」
「東は芽吹き、西は風吹、南は荒う、北は生誕する。東西南北全てに通ず、この世の理なり」
「まさか！時間稼ぎか」
「その通り・・・ やっと準備が終わったみたい」
強大なオーフィスの存在に隠れるようにして清明は準備を進めていた。
戦闘開始時清明が所持していた【呪符】は僅か二十枚。道満と戦うには少なすぎる。なので、二人が戦闘を繰り広げている間に自分は死んだ同士から【呪符】を集めて回っていた。
成果は合計三百枚と上々であった。
オーフィスと道満の戦闘はそれこそ拮抗していたがあまりにも格上。道満と一対一でやったとして勝てるわけが無いと言うほどに。
だから、戦闘に参戦するのは諦め道満に対する最強の一撃を放つ事に決めた。
陰陽師に伝わる奥義【夢想封印】
上級の陰陽師が五人集まってやっとこさ放てる陰陽術であるが、清明は一人で発動が可能でありそこから道満に特化させたものがある。
絶技【人魔封印】
人間をやめ魔へと堕ちた道満にこそ真価を発揮する専用の陰陽術である。
欠点があるとすれば詠唱が長く発動まで時間がかかる事だが、そこ

はオーフィスが時間稼ぎをしてくれたおかげで何とかなった。
「舞、舞、舞、魔の終わりの鐘は響く。終わり終わらせるのは人間なりや―」
全三百枚の【呪符】を空へ放り投げる。
呪力に反応し五つの槍へと姿を変形させ清明の上で漂う。
この世全ての悪を祓う強力な聖の力を込められた光に道満の全身は一瞬硬直し―刹那槍はその場から消える。
「【人魔封印】」
放たれるのではなく現れる一撃。
回避は不可能であり五つの槍は強制的に道満の肉体を貫く。
五つの内四つは四肢を貫き残った一つは心臓を貫く。だが、痛みや苦痛は一切ない。貫いたはずなのだが肉体に欠損は無い。
しかしすぐに身体の異変が判明する。
「呪力が使えんだとぉ」
「そうこの技を受ければ全技を封じる。それが例え神や悪魔や人外であろうと」
「こしゃくなぁぁ!コンナモノォォォォォ」
呪力を使えない道満の肉体は幼児の物。たとえ使えたとして逃れられるととても思わないが、その身体では明らかに不可能である。
その上身体が動かない行動不能状態である。そうなればただのサンドバックにしかならない。
「これで終わり」
道満が生き残るのは次々に肉体を移っていくからだであり、呪力を封印した今は転移は出来ない。なので肉片一つ残さなければ復活するはずがない。
右腕を腰の近くで溜め込み爆発的に魔力を集合させていく。
「これで終わったと思うなよオーフィス!ワシは序章にしか過ぎん!貴様の身体を狙う者は数多くいる。他者と絆を結び、あまつさえ愛などと言うものにうつつを抜かし続ければ貴様は負けるよぉ!貴様はァ孤独を目指していればよかったのだよォォォ!!」
「そうでも構わない。我はお前を倒せればいいから」

後にその山の光景を下から見た人間達はこう語った『龍が天に昇った』

放たれた魔力は地面に降り注ぐ事はなく、空へ宇宙へとひたすらに伸びていく。無限の地獄に囚われた道満の肉体は塵一つ残さず消えていく。

その日初めてオーフィスは人を殺した。

旅立ちの夜後編

陰陽師兼芦屋道満襲撃事件から三日が経った。
一つの山は植物の生えない死んだ土地と化し、妖怪の中にも多数の被害者が出ている。それでも幸いなのは大妖怪の中に死者はおらず、絶滅したと思われていた九尾などの少数妖怪を救えたところだろうか。
されど、あの惨劇を見た妖達の心の中は穏やかにはなれず、戦争の惨さを改めて思い知らされたのだった。

「しかして、妖怪の肩身は未だ狭しか」
妖怪全てを束ねる位置に座っている朧花はこの日までの疲労を飛ばすために酒を大量に飲み干していく。すでに十個以上の容器が転がっているのだが、その程度ではまだ満足には程遠い。
それも仕方がない。なにせ、この日までいくつもの問題が積み重なっていたからだ。
妖怪達にとっての宿敵とも言える安倍晴明の合流に、大量にいる中でどこの誰が死んだのかの確認、食糧難や備蓄不足などなど今後に生きていくのに重要な事柄が一気に押し寄せてきた。
その半分をどうにか片付けこうやって酒を飲む時間短い時間をしっかりと堪能しているのだ。
「う、ぅ・・・ ここは」
「やっと目覚めおったか」
眠気を含んだ声を上げたのは布団で横になっている巌だ。
顔は僅かに艶やかで服は下着以外何もつけていない。その鍛え抜かれた厚い胸板が、窓から差し込む星の光に照らされ輝く。
襲撃時に受けた傷は初めから無かったように消失し、切られた腕は見事にくっっている。
自身の復活した腕を眺めながら眠い目をこする。
「どんぐらい寝てた」

「二日だよ二日。あまりにもぐっすりなもんだから、ほれ」
朧花は自身の頬を軽く小突いいてアピールする。
最初は首をかしげていたが自分の頬を触って初めてそのメッセージに理解した。二日間も寝ていたせいか口元が緩くなっていたらしく、ヨダレが垂れていた。
慌てて両手で拭い何も無かったかのように朧花に視線を戻す。
「そんなに寝たのいつぶりだよ」
「お前が初めてここに来た時じゃないか？」
二人はあの日—初めて出会った数百年前を思い出す。
巌が初めてこの山にやってきたのはまだ朧花が産まれて十五年経った頃だ。当時朧花は神童ともてはやされ周りから期待を集めていた。
戦闘ではまず負け無し、妖をまとめるカリスマ性あり、頭もよくすぐに切り替えて行動できる。まさに妖のトップに相応しい妖怪だ。
だからこそ、飽きていたのだ周りの期待に。誰も自分の理想についてこず、理解しようとせず、ただおだて持て囃すだけだった。
そんな少年時代を過ごせば当たり前のように性格は拗れ、周りに一切期待をしない少年になる。
『おーい何か暇そうだな』
『暇じゃない』
『そうかそうか、よしやろう！』
『話を聞け』
第一印象はお互いに最悪。
しかし、この後流れるように戦闘が始まりそこで互いが互いを意識するようになる。
龍という妖怪の中でも絶対的な力を持つ希少種。
妖怪の中でも歴代トップの天才。
その二人は互いにライバルだと認め、最強の親友と定めた。
戦闘は三日三晩に及び結局引き分けで終わり気絶するように二日間も寝た。

「懐かしいな」
「全くだ」
　恥ずかしくもあり忘れられない夢のような一時。そんな日いらい久しぶりの二人での対話の時間かもしれない。
「そう言えばどうやって治したんだ？俺そこそこ耐性有ったと思うんだが」
「それなら心配いらない。自然回復待つのも癪だったからな、地脈を強引にねじ曲げてお前に集めたからな」
　いとも容易く言っているが地脈をねじ曲げるなど普通にやればその土地自体が消滅してしまう。
　だが、紫に安倍晴明。普通とは外れた規格外達の協力により被害ゼロでねじ曲げ、龍の巌へと地脈の魔力を当て傷を治した。
　小竜や弱龍などは普通に治す事ができるが、ある一定以上の龍になると種類によって多くの耐性がつく。巌も例に漏れず耐性が付きそれは、他者からの状態異常への耐性だ。
　そのため回復などかけられても治せるかはかけた者の実力次第となる。そんな彼だが否応に治す方法がたった一つだけある。それが全ての生命の生みの親—地脈へ繋げること。
　地脈が先に生まれたのか地球が先に生まれたのか定かではないが、それでも地脈があったからこそ生命が誕生したのは事実であり、現に巌が治ったのだから万々歳だ。
「死んだらどうすんだよ」
「お前が死ぬ？ありえないな。お前は俺より長生きする気しかないよ」
「はっ、絶対俺の方が長生きしてやるよ！お前の死に様笑ってやるわ!!」
「くくくくはははははは！」
　二人はこの罵りあいも懐かしいと顔を見合わせて爆笑する。
　笑い終わるとすぐに巌が酒を水のように滝のみし始め、負けれるかと朧花が後を追う形で飲み始める。
　勝負は二時間にも及び、最初から飲んでいた朧花が負け顔をトマト

のように赤く熟させる。
「ずいぶんとぉぉ弱くなっぁたなぁ」
「うっせえ」
つまみに持ってきていた干しイカと肉は無くなりそろそろお開きにしようかと朧花が片付けを始めながら口を開く。
適当に返事を返し何を考えるでもなく、ただぼーっとしているとある事を思い出す。
「そう言えばオーフィスはどうしたんだ、二日間寝てたから会ってない訳だが」
「・・・そうだったな。お前は今起きたばかりで知らないんだったな・・・」
朧花の言葉に何処となく虚しさが混じっているように感じていた。

???
妖怪の大事な場所とされる祠にて、二人の影が薄暗い火に影を揺らしている。
ひたすらに奥へ奥へ足を進め、途中二つに道が別れるも男の方はさも分かっているかのように戦闘を進む。
そして、祠に入ってから数時間。やっとその最奥へとたどり着いた。
そこは大きく円を描いてくり抜かれていて、天井の方に伸びる光を闇が喰らってしまう底なしの闇が天井にいる。
二人は向き合い頭を縦に降ると中心へ向けて歩く。
中央にそれはあった。
祭壇であろう台座には金や赤の装飾が施されていて、その上に鎮座している黒い宝玉。これこそが二人が探し求めている代物である。
「ありましたね」
「口伝や古文書を読み解いて推測したのだもの、無い方がおかしいわよ。で、貴方などう感じるの？博麗さん」
嫌味ったらしく博麗と言われた旧姓安倍晴明はあんたが決めたんだろとアイコンタクトを返す。

源姓博麗清明とし、妖怪達の中にも打ち解けかけている。
ふっ、紫はあまりに子供じみた返答に鼻で笑うと清明は舌打ちを返す。
「あら？」
「どうした？」
「……　まぁいいわ。こんな所長居しても気分が悪くなるだけ」
「それには賛成だね。邪気が高すぎる—大妖怪クラスでは無いと妖怪でも耐えられそうにない」
「そうね、ならここは侵入禁止にしましょうか」
扇子を軽く振って開き笑う。その表情—紫の本性を知る清明に取っては寒気がしてしまう。
多少言葉を投げかけ合いながら祠から出て、新鮮な自然の空気を大きく吸い込む。
祠のように空気は重くなく、出た瞬間から一瞬で空気は軽く温かくなる。
「ふぁ…　眠いな」
「寝てもいいわよ？ちゃんと守るから」
「その守るが怪しすぎて眠れないよ」
明朝から強制的に拉致され連れてこられたせいで清明の眠気は高まるばかりだ。それに、前日に色々とナニをしていたので余計に眠気は強い。
襲撃後生き残った清明とシエルは付き合うより早く結婚をする事になった。二人が愛し合ったと言う側面もあるが、実際は紫が後押しをしたことが大きい。
襲撃いらい我関せずだった妖怪達の思考はガラリと変わり、人間と敵対したくない、死にたくない。
簡潔にいえば争い事を避けたいと意見する妖が増えていった。無論大妖怪達もその事に乗り気であり、どうにか人間と共存していく方法は無いかと模索し、人間に慣れてもらうため住処の中に人間達の村を作り慣れようと言う新たな作戦が建てられた。
その作戦の根幹は幻想郷プロジェクトであり、現在製作中の清明と

紫が何とかするために奔走し疲労が溜まりに溜まっている。
「あともう少し・・・ やはり結界を何とかしないとな」
「頑張ってちょうだい、私は私で色々するから」
「了解。正直もう一人ぐらい人手がな」
「無理よ、私達についてこれるのは他に言えばお母様だけ。けど、お母様はもういないのよ」
紫は悲しそうに言葉を吐き出す。それに同調するように清明はだよなと返す他なかった。

日付は一日前の襲撃後に戻る。そう、そこでは一人の幼女が頭を悩ませながら布団でゴロゴロしていた。
『ワシは序章にしか過ぎん！』
『貴様の身体を狙う者は数多くいる』
確かに芦屋道満はどうにかなったがその全ての元凶はオーフィスなのだ。
山で放った魔力攻撃により、安倍晴明と芦屋道満が反応し襲いかかってきた。もしそれが無ければ―いやそれはｉｆ（もしも）の話。終わった後にあぁだこうだ言っても意味が無い。
重要なのはここに居ればまた敵が来る可能性があるという事だ。
――それだけは嫌だ。今やっと妖達は立ち上がろうとしているのに、それを壊すのは嫌だ。
この先の選択肢は少ない。このままここに残るか出て行くかの二択。どちらを選んでも茨の道なのは揺るがない。
けど、どちらの方が特かそう言われたら・・・・・

「お母様どこかへお出かけですか？」
人工的な明かりは蝋燭の火だけで淡い光に照らされた夜道を一人歩いていると、背後から愛娘が心配そうな声をかけてきた。
「大丈夫も―」
「いいえ。心配です・・・ お母様の顔がそんなに悲しそうなんですから」

言われて気づいた。
誰にも合わず出ていくのならば狭間を使えばいいのにそれをせず一人夜道を歩く。多分誰かに止めて欲しかったのだ。
人知れず出ていけば自分の存在が消えてしまう。そんな錯覚をしていたから。
不意に水滴が目元から流れ落ちる。
空を見上げるも雨は降っていない。降っているのは心の雨だ。
「お母様」
「大丈夫・・・ 我・・・ 決めたから・・・・・・ 出て行く・・・ ここを」
「だっ・・・・・・ 分かりました。こっちは私が何とかします、それとたまには顔を見せてくださいね」
「うんわかった。ありがとう―紫」
娘の記憶の最後に泣き顔を残すわけにいかない。男の心であっても紫にとっては偉大な母なのだ。
だからこそ泣き顔なんて無様な物を残さず、屈託ない満面の笑みで返す。
紫は今すぐにでも泣き崩れたいが母の前でほんな無様な真似は出来ないと、歯を食いしばって無理やり笑う。
頬がひきつりわざとらしく見えてしまうかもしれない。それでもそれしか紫にできることは無いのだ。
オーフィスは最後に軽く見てまわろうと狭間を使わずに、歩いて別れることにし身を翻し闇へと身体を溶かしていく。
「あぅ・・・ ぁ〝ぅ〝ぅぅ・・・ ううぅ〝ぁぁぁぁ」
オーフィスの身体が完全に見えなくなった所で膝から紫は崩れ落ち、声を抑えながら年齢そのもののように泣き出した。

一時間かけ一通り見終わると離れたくないと言う気持ちも強くなったが、この世界を壊したくないと切に願う。意思は強固に石のように硬くなる。
「バイバイみんな」
「ほほう、家出娘が何をしているかと慌てて探していたが・・・ くっく

くく随分と楽しんでいたようだなオーフィス？」
山にお辞儀をして挨拶をしていると背後からとてつもない量の圧力（オーラ）を感じ、一気に飛び退いて距離を離す。
「誰」
「誰か・・・ 随分と他人行儀だな、昔はあんなに挑みかかってきたと言うのに」
全身を白装束で覆い、両手首足首から赤い龍が心臓に向けて伸びる刺繍が施されていて、夜ながらも赤く紅い真紅の髪をかきあげながら、過去を楽しそうに語る。その表情にはどこか後悔があるような気がした。
されども男の歩―一歩一歩が恐ろしく鋭い抜き身の刃が肌に刺さるような錯覚さえしてしまう。
ゴクッ。
今まで感じた事の無い感覚に身を震わせ、自然と上がってきた唾を飲み込む。
「さぁせっかくの再開だ・・・ こんな野暮な所じゃなくて楽しい所に行こうか」
両手を正面で合わせ小さな音を鳴らす―刹那、世界は狭間に侵食されていく。
オーフィスのように人が通れる小さいサイズではなく、山すら飲み込む大きな狭間が侵食する。
あまりの速度に回避不能。慌てて狭間を作ろうにも、狭間の中に狭間を作ることなど不可能だった。
「忘れているようだから言っておくが、狭間は私の世界だぞ。このグレートレッドのな」
男は両腕を広げ高らかに宣言する。
オーフィスの無限とは違うもう一つの夢幻グレートレッドの名を。

殺人倫敦のセブンデイズ

一日目～夢の地へ冒険をI～

平安時代ははるか昔。年号は平成と呼ばれる二〇〇〇年に突入し六年が経過した。

妖怪とはファンタジー御伽噺だけの存在となり、陰陽師も昔ほどの力はなく小さな悪霊を払う程度しか出来ない。

時の流れとは残酷であり木々がなぎ倒され高層のビルやコンクリート製の建造物が至る所に建てられた。自然は見る影も無くし都会で雑草や景観用の木しかない。

その中の一つ駒王町にて一人の幼女が高級なスーツに身を包んだ男にアイアンクローされていた。

「痛い」

「そりゃな痛くしてるからな・・・ もう少し強めるかぁ？」

アイアンクローされている幼女はオーフィスと呼ばれる無限の龍神である。

平安時代において妖怪達と暮らし平和を守るため奮闘したりした人外。されど昔の話であり今はだいぶ変わっている。

八重歯をギラつかせる男―グレートレッドは常のイライラを晴らすためにより一層力を強める。

メシメシ骨が軋む音がするが、お構い無しにどんどん強くしていく。

「二人とも落ち着いてくれ。これじゃあ安心していけないよ」

「だな。いくら心配性だからってよ、俺達子供だけど子供じゃないぜ」

二人の痴話喧嘩に似た何かを見せつけられていた二人の少年は口々に訴える。

歳はわずか七歳なのだが、口調や漂わせる雰囲気は大人と大差ない。堂々と立つその姿は歳を歳と見せることは無い。

その上服装が独特であり、黒のワイシャツに黒のロングズボンを着ていて、灯りが無ければ闇に完全に溶け込んでしまう。

かたやもう一人は自身の身長より長い真紅の槍を肩に乗せ、紫のライダースーツに似た何かを着ている。
「そうだな、今はこれでおしまいだオーフィス。曹操とクーフーリンに感謝しろよ」
「うぅ・・・・・」
曹操と呼ばれた少年はオーフィスの反応に苦笑いを浮かべ、リュックに詰めるだけ詰めた荷物を背負う。
クーフーリンは真紅の槍を亜空間に収納し、動きやすくしてからこちらも色々なものが突っ込まれ丸く膨らんだリュックを背負う。
「あちらに一応協力者がいる。何かあったらそいつを頼れ」
「はい」
「それじゃあ生きて帰ってこいよ二人とも」
「おう」
「任せてください」
グレートレッドは二人に檄を飛ばしその反応に満足すると、オーフィスの首根っこから掴みあげ前へ突き出す。
猫のように全身伸びきり首が消えたオーフィスは、また二人が帰ってくる事を信じ言葉を投げかける。
「いってらっしゃい」
「いってきます!」
声高らかに返答し小さいながらも大きな胸を張って外へと飛び出していった。

■■■
京都の妖怪の山を出たオーフィスはグレートレッドに誘拐され次元の狭間に戻される。
しかし、すぐに気づいたのだ—オーフィスの魂の不自然さに。
その眼は全ての真実を見抜く。
無限の魂にあるのは人間のそれと同等の弱い魂。飲み込まれていない方が異常な不安定さを内包していた。
「お前何者だ。オーフィスだがオーフィスではないな」

「ん、我はオーフィス。けどオーフィスじゃない」
誤魔化しようがないと瞬時に悟り自分の身に起きた事の全てを話した。
異世界や神による転生と信じ難いことまみれだが、オーフィスの現状がそれを真実だと物語っている。
否定の余地は無いと頭を縦に振り告げる。
「なら俺も手伝おう。どうせ暇してたからな」
後に分かる事になるが、グレートレッドはちょっかいをかけて来たオーフィスが突然消えて寂しくなって探しに来たらしい。
夢幻は孤高の存在であり、唯一無二の存在。
目には目を歯には歯をと日本の諺にあるが、それは正しく夢幻には無限でしか相容れない。一つだけ例外はあるが。

そして、そこから行ったのは人間に溶け込むとともに大きな権力を手に入れる事に他ならない。
外国では大陸続きとなっていて侵略・戦争が絶えないが、現状の日本は僅かに違う。
他の大陸と隔離された島国であり、江戸時代には他国との関係を断ち切る鎖国を行ったりしていた杞憂な国だ。だからこそ日本で権力を高めてようと動いた。
日本が将来どのような未来を辿るのかは、人外が下手に干渉しなければ史実通りなので、金を多く手に入れるタイミングや力を伸ばしていく時を見誤らずどんどん成長した。
結果、日本の企業の三分の一の権利を持つ大企業になり、外国にも手を伸ばし始めている。
そんな折オーフィスは一人の少年と出会った。
親から気色悪いとサンドバッグのように殴り蹴られ、生きる希望すらないる神器（セイクリッド・ギア）所有者だ。
その少年を救った事から始まり彼ら専用の孤児院を作り、多くの子供達の将来を変えていった。

「ふぅ・・・ 確かこのような感じだったか」
自分の家族が住んでいる孤児院〝天童園〟の生い立ちなどを思い出しながら、移動の暇な時間を潰していく。
いつもならば読書をしているのだが生憎と本を全てバックの方に入れてしまい、今は手元にないので一切することが無かった。
「むにゃむにゃ・・・・・ もう食べられねぇよ・・・」
隣では親友のクーが呑気に熟睡している。
あまりに見事な寝顔に殴ってやろうかと考えすぐに頭を振って心を落ち着かせ、次に目的地の事を考え始める。
今向かっている先は魔術師達の聖地とされる時計塔のあるロンドンだ。
人間ながらも人外に対抗出来る者達こそ魔術師と呼ばれ、日本で言うところの陰陽師に近い。魔術と陰陽術は形態が違うのでまるっきり一緒ではないのだが、大まかに観れば一緒と言えなくもない。
二つの大きな相違点とは血の重要性である。
陰陽術は血の有無に関係なく、努力すればある一定のラインまでの力が手に入りそこから先は才能による。
魔術は血が重要であり、歴史を重ねた貴族と呼ばれる者達がより強い力を得られ、歴史の浅い血では何かの要因がない限り原則として弱い。
この事から分かるように魔術師は血に絶対の自信があり慢心などをしているので、そこをあまたの人外達が魔術師食料とするために生息している。
「ふむ、確かすこし前にテロがあったはずだ・・・ それならばこの人の少なさにも納得か」
辺りを軽く見渡せば多くの空席が目立つ。いつもの機内ならば満席に近いはずなのだが、数ヶ月前に起きたテロによりロンドンへ向かう人は少ないようだ。
「まぁだからこそ俺の力が試せる」
まだまだ小さい手を握りしめ過去の過ちを悔いる。

曹操は家族を悪魔に奪われ怒りで眠れる力を覚醒させてしまった。
神器（セイクリッド・ギア）の中でも頭が一つも二つも抜けている神滅具（ロンギヌス）と呼ばれ、その名の語源となっている【黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）】を所持している。
その力は絶大であり魔に属する物ならば、まともに切らなくても掠らせるだけでも大ダメージで、敵によっては即死に至らしめる事が可能だ。
その上、中国の偉人たる曹操の血を魂を引き継ぐ曹操が所持するので、鬼に金棒とはよく言われる。
その力を持って両親を奪った悪魔は一時の生存すら許さず、復讐を果たす。
復讐は終わった。が、それでと虫の居所が収まらない。
なぜ、ただ暮らしていただけの両親が殺されなきゃいけなかったのか。
なぜ、殺したやつが殺される瞬間に命乞いをするのか。
なぜ、悪魔を殺したのに罪悪感に押しつぶされそうになるのか。
当時の幼き頃ではまだ判断しきれなかったが今なら分かる。あの日あの時に■■■と呼ばれる少年は死に、曹操が闇に染ったのだと。
『搭乗のお客様にお伝えします。この便はまもなくロンドン・ヒースロー空港に到着致します。シートベルトをしっかりとして待機してください』
「やっとか」
機内に鳴り響くアナウンスによって知らされ、近づくロンドンに向け鼓動が早くなる。
闇に落ちた俺を救ってくれたオーフィスのために一人で生きいけるのだと、もう道を踏み外さないと誓うために挑戦する。
この短いが濃厚な七日間をロンドンで過ごすのだ。